

巴爾幹半島

292

2

国立国会図書館



始



46P / 物産副庫文學大俗通

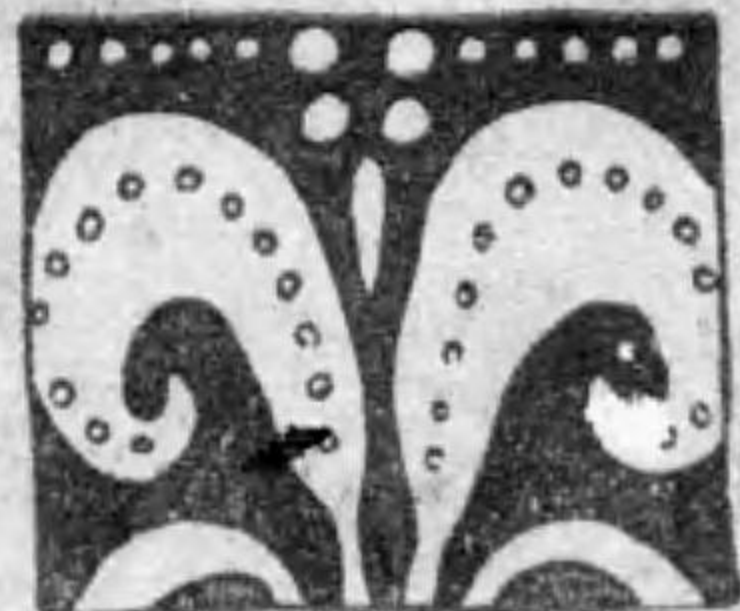
東 西 時 論

第 五 編

巴 爾 幹 半 島

長 瀨 鳳 輔 述

通 俗 大 學 會 編



裁 後 藤 男 爵
長 新 渡 戶 博 士
幹 龍 居 文 學 士

通 俗 大 學 會



東西時論は各冊金十錢、通覽一時間を出でざるべく忙中無比の好讀料也

東 西 時 論

第 五 編

巴爾幹半島

通俗大學會編

a 20



爾神宗品

15211

今の世の日本人たるものは、一日と雖も世界の大勢に通せずしては濟むべからず、坐して世界の變轉限りなき形勢を知らんとする最容易、最廉價の方法は、時々の刊行物乃至新聞雜誌等を讀むに如かざるも、國語の同じからざる不便もあり、又自由に讀み碎く人にも讀むべき餘暇なきを憾むもあるべし。されば本會は「通俗大學文庫」を發行して諸科の知識を社會の各階級に普及せんとすると同時に、副産物として「東西時論」なる通讀一時間を出でず、定價僅に十錢の小冊子を發行し、英米露佛獨并に支那等より取り寄する材料に據り、凡そ時局に關する問題、現代の思潮言論にして苟も世人に紹介するの必要ありと信ずるものは、時を移さず要を抜きて隨時刊行し、主として「通俗大學文庫」愛讀諸君の時事問題を講究せらるゝ參考に供へんと欲す。

通俗大學會同人白す

小引

本書は著者が今春『東京日日新聞』紙上に連載したるものを訂正増補したるものであるが、何分にも紛糾複雑を極はめて居る巴爾幹の事情を斯かる小冊に於て遺憾なく述べ盡くすことは到底不可能である。されば杜撰孟浪の責は著者の甘んじて受くる所であるが、若し之により些少にても讀者諸君の參考に資するところが出来たならば、望外の幸福である。

大正五年三月中旬

著者認るす

巴爾幹半島 目次

一 總説……………一

第一章 塞爾維……………七

サラエヴォの悲劇○故埃國皇儲フェルヂナンド大公○人種上より觀たる塞爾維人○塞爾維の變遷○コツソヴォの決戦○塞爾維の獨立運動○塞國公ミカエル三世とミラン四世○ミランと塞爾維王國○波瀾に富める塞國王ミラン一世○ミラン王の最期とアレキサンデル一世の失政○塞國王室の一大悲劇と現王ペーテル一世○何故に塞國が歐洲大戰の火元と爲つたか○地理上より觀たる塞爾維王國○塞爾維人の國民性○塞爾維の前途○

第二章 黒山國……………七八

健氣なる黒山國○黒山國の變遷○可憐なる黒山國王ニコラス一世

目次

第三章 勃牙利

.....九四

民族上より觀たる勃牙利人○舊勃牙利帝國○土耳其治下の勃牙利○伯林條約と勃牙利公國○勃牙利の前途如何○勃牙利の地理的觀察

第四章 羅馬尼

.....一一七

第五章 新アルバニア公國

.....一二五



バルカン半島略圖

巴爾幹半島

長瀨鳳輔述
通俗大學會編

一 總 說

巴爾幹半島の如く種々の點に於て興味の深い土地は、又さ多く世界に無からうと思ふ。

先づ試みにその歴史に就て見るに、歐洲文明の淵源として知らるゝ希臘

一 總說

一

は太古此の地に於てその繁榮を極め、中古、北は露西亞、東は印度及び支那に迄もその影響を及ぼしたるビザンツ文明は、此の地に於てその發達を遂げ、更に近世に於ては、阿士曼土耳其族が此の地に據りてイスラム文明の宣傳者を爲り、今尙世界三億萬の回教徒は君府をばその本山として仰いで居る。

斯くて又此の半島は古來世界帝國の中心を爲つたことが、前後實に四回、即ちその第一回はピレクリス時代の希臘帝國、第二回は歴山大王時代の希臘マセドニア帝國、第三回はコンスタンチノス時代の東羅馬帝國、第四回はスライマン時代の阿士曼帝國である。就中土耳其は今日でこそ瀕死の病人と呼ばれ、殆ど全く歐洲の天地より驅逐せられ、辛うじて西方亞

細亞の一角にその餘喘を保つて居ることは言へ、往時は新月旗の向ふ所天下に敵前なく、「土耳其來」と叫べば、泣く兒もその聲を止めたこと云ふ程な勢であつた。而もその領域は巴爾幹半島を中心として北は匈牙利及クリミア半島より、南は亞刺比及埃及に至り、東は波斯の西境より西は北アフリカのアルベリヤに達し、その廣袤實に約六百萬平方基米突、裏海、黒海、多島海、紅海、波斯灣及地中海の東半部は盡く皆その帝國內に包含せられ、その威力は遠く、印度洋よりジャバ、スマトラ諸島に及ぼし羅馬帝國にも劣らざる所謂世界的帝國の實を擧げたのである。

然るに今や此の半島は政治上に於ては全たく土耳其の手より離れ、新たにその主權者を迎へんことし、文明上に於てはスラーヴ文明と日耳曼文明と

の角逐場たるの觀を呈して居る、果して此の兩者の中何れかゞ克く月桂冠を贏得るであらうか、是は歐洲戦局の前途に共に、吾人の眼前に提供せられて居る處の興味深き問題である。抑も巴爾幹半島は歐洲大陸の十五分の一にも過ない土地で、丁度朝鮮を除きたる我日本帝國の面積に等しいのであるが、今や都合七個の國より成り、各獨立の王國を稱して居る、是れ已に一奇觀であるが、而かもその中一番大きな羅馬[○]尼[○]でも、我北海道に九州及び四國を合はせた程のもので、その人口が七百六十萬に過ぎない。その一番小さい黑[○]山[○]國に至りては、最近の巴爾幹戰爭以前迄は、僅かに我四國の半分位で、その人口の如きも二十萬を超えなかつた。戦後大に土地を擴大したが、それでも人口はまだ五十萬に達しない。希臘は戦後その面積に

人口を殆ど二倍大に増加したがそれにしても北海道に九州を合はしたもののよりも小さく人口は四百三十萬である、塞[○]爾[○]維[○]も戦後七割餘も版圖を擴けたが、それでやつと人口が四百五十萬で、面積が北海道位になつた。勃[○]牙[○]利[○]は戰爭前迄は、羅馬[○]尼[○]に亞いで一番大きかつたが、第二回の巴爾幹戰爭で大敗した結果、その新占領地の割前が比較的が一番少かつたので、今日では面積人口共に希臘や塞爾維に殆ど大した差が無いようになった。亞[○]爾[○]坡[○]尼[○]は戰爭と同時に土耳其から獨立して出來た新王國であるがその面積が勃牙利の四分の一程で、人口は八九十萬に過ぎない、土[○]耳[○]其[○]は戦後殆ど半島に於ける領地を喪ひ、今ではやつと亞爾坡尼大の地積を保有して居る。

斯様に小さな國が、しかも狭い半島内に割據して居て、互に強大にならうとして競争して居るのであるから、此地に紛擾の絶えぬのも無理はない。然るに、それも此等の小國同士の争ひ丈であれば、ほんの小供の喧嘩同様で、別に大したことも無いが、兎角大人の列強が手を出すので常に事が面倒になり、終には歐洲一般の平和を攪亂する様な大事件を惹き起すのである。夫故此迄歐洲の鬼門だとか、危険地帯とか稱せられて居て、歐洲政治家の心腦を悩ましたことが一再にては足らなかつた。現に今度の世界的大亂の如きも、その本は言へば、此の半島から起つたのであつて、歐洲禍亂の伏魔殿たるの名の空しからざるを證明して居る。されば此半島諸の事情に就て究はむるのは決して徒勞の業で無かろうと思ふ。

第一章 塞爾維

○サラエヴォの悲劇

今回歐洲戰亂の導火線は何であつたかと言へば、誰しも一昨年の夏六月廿八日のサラエヴォ事件であることを否認せぬであらうが、是より塞爾維の國情に就て語たるに方たり、先づ話の順序としては比較的最近手に得たる正確なる報道に據りて、此の兇變に就て述べやう。

奧國皇儲フランツ・フェルディナンド太公は、ボスニア州に於て行はれた第十五及び第十六軍團の演習に臨み、急にサラエヴォ市を訪問せんと思ひ立たれて、その旨を傳へられた。するに市の官憲は何分にも突然の事であ

つたので、充分に奉迎の準備をする暇もなく、唯僅に太公並に同妃を停車場に奉迎するを得ただけであつた。斯くてその一行は、自動車を驅りて此地方に特有なる凹凸甚しき街上を疾走した。偶此の日は塞爾維人の祭日であつたので。市街は非常に雑沓して居た。而かしてその群衆中には加特教徒のクロアート人も居れば、希臘教徒の塞爾維人も居り、そうかと思へば回教徒の塞爾維人も居る云ふ有様であつた。

皇族の一行はアツベル埠頭に沿うて進行し、將にチュミリア橋を渡らうとした一刹那、一個黒色の包物が何處よりか飛んで来て御召車の中に落ちた。太公は何氣なく直に之を拾ひて街上に抛れるこ、次に進み來つた自動車の前で破裂した。此の車にはウアルデック伯と侍從武官が乗込んで居た

が、爆彈の爲に車上の二人と六七名の傍觀者が負傷した。

太公はそれより尙進んで市廳に至られたるが、頗る憤怒の氣味で、市長に向ひ「卿は何の辭を以て予に對せんとするか、予は卿を訪問せんが爲めに此處に來たのである。然るに爆彈を以て祝せんとするは何事ぞ」と言はれた。市長を初めとし市の高職はいさ恐縮して歡迎の辭を述べたが、太公は唯形式上の答辭をせられたのみで、それより直に近侍の者共が切りに諫止したのに拘はらず、先刻爆彈の爲めに負傷した副官を見舞はれんが爲めに、再び身を自動車に投じ、病院指して赴かれた。

するこ丁度午前十時五十分の頃であつた。太公の自動車は再びアツベル埠頭に沿うて進みフランツヨセフ街との交叉點に達した時、又もや爆彈を

投するものがあつたが、別に破裂しなかつた、此の時急に前進せる一青年があつた、ブラウニング式の短銃を以て太公目指して三回の狙撃を行ふた。之が爲に太公は頭部を撃たれ、公妃は太公を保護せんせられて、又彈丸に中たり兩公妃共に致命傷を受けられ人事不省に陥られた、それより直に市廳に運びたるに、一時精神を回復せられたが遂に最後の聖禮を受けらるゝと同時に、忽焉として不歸の客に爲られた。此の青年は名をプリンチップと呼ぶ十九歳の中學生であつて、大塞爾維黨に教唆されて此の兇行を遂けたのである。

○故奥國皇儲フェルチナンド太公

此の不幸なる奥國皇儲フェルチナンド太公は、果して如何なる人物で

であつたかと言ふに、本來蒲柳の資であつて、青年時代には別に之を言ふて傑物たるの徴候を示して居なかつた。而して或る一部の人の評する如く實際彼が卓絶したる政治的技倆を有して居たかは、聊か疑問であるが、彼は政治上に於て一己の見識を具なへ、又一大抱負を有して居たことは、誰も之を否定せぬ様である。

そこで吾人の問はんところは、彼の執れる政策であるが、之に就て英國の論者は多く次ぎの如くに論じて居る。

太公は夙に奥國國內に種々の民族が住んで居て、之が爲め政治上の状態が甚だ不良であることを憂慮せられ、之に對する政策に餘念がなかつた。特にクロアート人、塞爾維人及びスローヴェン人等の所謂南スラー

ヴ族がその數六百五十萬に達し、巴爾幹戰爭以來、塞國の勃興するを見て、彼等は將來奥匈國內の同胞たる彼等南スラヴ族セハプスブルグ家の覇絆より脱せしむるものは、必ず塞國であらうと云ふ觀念を懷き、近來著しく民族的一致の運動が盛になつて來たので、太公は飽迄も大塞爾維主義に對抗するの必要を認め、その政策として奥匈國の二元的組織を破壊し、之に代ふるに聯邦組織を以てし、諸種族をして各その地方の自治を得、聯邦議會なるものを起してその結合を固うせんと思はれた。

然るに參謀總長コンラード・フォン・ヘルツェンドルフによりて代表せられたる維也納の軍人社會と一方ステファン・チツサア伯の率ゐる匈牙利の政治家等とは、極力太公の理想に反對し、彼等は如何なる犠牲を拂ふこ

も現在の二元組織を維持せざるべからずと爲し、之が爲には戰爭をも敢て辭せざるの覺悟を有し、現に第一巴爾幹戰爭の當時ヘルツェンドルフ將軍は太公の意志に反して塞國及露國に對する攻撃戰を企圖した程である。

されば實に太公は奥匈國內に於ける所謂野中の一本杉であつて、彼の政敵は國外よりも寧ろ國內に在つた。恰も佛國革命に於けるミラボーの如く、被は禍を轉じて福と爲し得た唯一の人であつた。

而かして又英國の論者中には、太公を暗殺したるものは、大塞爾維黨でなく、奥匈國內に於ける政敵の「廻し物」であつたらしいと説いて居るものが決して尠く無い。(ネルソン氏の歐洲大戰史、タイムス社發刊の歐洲戰史、

ラウンドテーブル誌の戦亂號等参照)然るに佛國前外相アノトー氏の如きは近著歐洲戰亂史論中に於て次の如くに論じて居る。

太公は政治家に非ざるも一己の見識又大なる慾望を有し、一九一一年伊太利に對して開戰を企圖したがエーレンタールの絶對的反對に遭うて遂に實行せられなかつた。然るにコノピスクに於ける獨帝維廉との會見後更に、塞爾維に對して一層その野心を逞ふせんとするに至つた。惟ふに此の時獨帝は巧にフェルヂナンドの心を籠絡し、彼の慾望を利用して大獨逸政策を成就せんとしたるに相違無い、そは獨帝が太公の暗殺を耳にしたる時覺えず發したる

朕は全然朕の事業を再始せねばならぬ

この言に徴しても、推知するに難からぬ。

コノピスク會見の際太公と獨帝とが如何なる意見を交換したかと言ふに之に就ては羅馬尼の政治家タケ・ヨネスク氏が充分に精確なる説明を爲して居る。氏の證言又他の秘密しかも信憑すべき出所より得たる報道を綜合すれば、兩會見者の目的は略次の如くである。即ち兩日耳曼帝國の確定的協約により「東方進出」の大企圖を遂行せんを欲し、巴爾幹半島に對する奧國の畫策を、君府並にアドリア海に於ける獨逸勢力の發展策を確定的に一定せしめんとするに在つた。現に此時テューグリヒ・ルンドシャウ紙もゴノピスクの會見によりてトリエスト問題は解決を告げたを論じたる如く、奧國はトリエストを獨逸に譲ることを承認し、

その代償として巴爾幹の運命を左右し得るは大聯邦の盟主を爲るこゝが出来得るを爲した。然るに此目的を達するが爲めに遭遇すべき主なる障碍は塞爾維であるから、先づ之を屠る必要を認めたとのである。

乍併斯かる決心は必ずしもコノピスクの會見に依りて始めて爲されたのでは無かつた。是より先き一九一一年にボスニア及びヘルツェゴヴィナに旅行した一歐人はサラエヴォに於て奥匈國の某高官と會談した時、問うて言ふには

エーレンタール男がノヴィバザール州占領を斷念したのは何故であるか、歐洲諸國はその理由を知るに苦しんで居る。奥匈國はサロニカに出づるの野心をば果して永久に放棄したのであるか

と。高官は之に對して毫も放棄したるに非ずと答へ、尙

ノヴィバザールを經由するの道路は甚だ險惡であるから、吾人に他の道路を取る積である

と言つた。然らば何れの道路を取るのかと重ねて問ひたるに

ベルグラード及塞爾維の領土を經由する道路を取るの考へである

さらば之を實行する爲めに、一大戦争を行ふの覺悟なりやと再び問ひたるに、勿論の事なりと對へた。

皇儲は實に右の意見に賛成して居たのであるが、彼の夢想したのは尙之よりも大なるものであつた。即ち彼は奥匈國に一種の聯邦帝國的制度を布き、以て國內の紛擾をば一掃すると同時に、更に又塞爾維は勿論羅馬

尼及勃牙利をもその帝國內に編入し、恰も獨逸帝國に於けるバ、リアその他の如き例に倣はしめんことを企圖を有して居た云々。

右のフェルヂナンドが巴爾幹諸邦を一統して一大聯邦帝國を組織せんことを一大野心を有して居たこのアノトー氏の説は、吾人には稍耳新しく聞えるが羅馬尼の前首相タケ・ヨネスク氏の如きも亦次の如くに云うて居る

予の最も確實なる出處に就て聞き得たる所に據れば、皇儲は羅馬尼人に向つて、羅國の國民統一を成就せんことを、奧帝國に合するの外良策なきを説き、羅國をその帝國內に加はらしむることが出來得るもの信じて居た。尙彼の企圖は一層大膽なる計畫によりて補足せられた。それは外でも無い。塞爾維をも奧帝國に吸収し、且つ勃牙利希臘及び羅維馬

ニが土耳其より奪取したる土地をも漸次に取返へさうとした事である。

彼は斯くの如くにして露國の勢力を破壊し、以て巴爾幹諸邦をば單なる地理上の名稱に止まらしめんことを欲した。而して口實のわり次第塞國を征服してその土地を奪はんことを企圖を有して居た。斯くて彼はコノピスタに於て彼と同一の幻想家たる維廉帝と會見して天下を二分するの大計畫を立てたのであつた。

アノトー氏は更に故奧國皇儲フェルヂナンド太公の政策に就て次の如くに評して居る。

太公は維廉皇帝の助言を煽動に乗りて巴爾幹半島統一の野心を遂行せんことを欲し専らその計畫に腐心しつゝあつたが會々ベルヒトールドのアルバ

ニア政策が失敗に歸したる結果、奥匈國は是非共一六勝負に訴へねばならぬ破目に陥つた、仍で太公は此の一六勝負を試みる爲めに、自ら進んでサラエヴォに向つて出發したのである。而して何故に彼が斯かる決心を取るに至つたかと言ふにそれは同年六月初旬塞國と黒山國とが一層互に其結合の鞏固を圖り、先づ兩國の税關を統一し、且又共同の外務省と大藏省とを建設するに決し而も露國の保護獎勵の下に之を行はんとするの風説が頻りに傳播せられた爲であつた。

そは兎も角太公の意思並に計畫は、絶對的秘密に附せられて居たものゝその幾分かは外部に漏れたものを見え、ボスニアの陰謀者は夙に太公の汎塞爾維主義撲滅の計畫を豫知し、飽迄も之に敵抗しやうと決心した。

茲に於て衝突の勢ひ避くべからざるに至り、遂にサラエヴォ事件を惹起したのである」云。

要するに、アノートー氏の説に従へば今回歐洲大亂の直接原因はフェルヂナンドの一大野心に胚胎したるものであつて、而も其背後には獨帝維廉が控へて居た云ふのである。然るに前にも述べた如く、英國に於ける多くの論者の説は、殆ど全く之と正反對であつて、太公は奥匈國政治家中最も穩健なる思想を懷いた人であつて、克く亂麻の如き國內の形勢を革正し得る人物は彼を除いては他になかつた。故に彼をして天壽を完うせしめたならば、恐らく今次の如き大亂は起らなかつたのであらう。随つて又彼の暗殺者が果して大塞爾維黨であつたかは頗る疑はしい、されば彼の死を衷心か

ら喜んだものは寧ろ國內に於ける彼の政敵であつて、獨帝維廉の如きも確にその一人であるとして信すべき充分の理由があるに論じて居る。

斯の如く英佛兩國に於ける論者の意見すら全然相違して居て、何れを信じて可なるか人をして迷はしむるのである。乍併太公の變死を聞いて心窃に喜んだものが、その政敵であつたか、或は太公の暗殺者が大塞爾維黨で無くて奧洪國の廻し者であつたらしいと云ふ英國側の説も容易に信ずるところが出来ぬが。さりさて又アノトー氏の説の如くに、果して太公が巴爾幹統一の大野望を懷いて居たものやら、是亦甚だ疑はしい。されば今回の歐洲戰の直接原因たるサチエヴォ事件の真相すらも今尙不明であるに謂はねばならぬ。

そは兎に角とし、是より塞爾維か如何なる國柄であつて、又何故に奧匈國と衝突するに至つたか云ふ事實に就て述べ様と思ふ。

○人種上より觀たる塞爾維人

塞爾維人は露西亞人と同様にスラヴ民族に屬して居て、勃牙利人や奧匈國領内のクロアト人やスロヴエン人等と共に、南スラヴ族の名を以て知られて居る。然るに塞爾維人とクロアト人は、人種上並に言語上に於て勃牙利人やスロヴエン人よりも最も親近の間であるので、學者は人種上之をセルボ・クロアト族と呼び、言語上塞爾維語族と稱し、全然同一視して居る。唯兩者の區別は、塞爾維人は露西亞人と同様にキルリツク文字を用ゐ、宗教は希臘教を奉じて居るに反してクロアト人は羅甸文

字を用ゐ、加特力教を信じて居るだけであつてその容貌は勿論言語並に文學上に於ても、何等大なる差が無いのである。

全體此の南スラーヴ族が何年頃に巴爾幹半島に移住し來たつたか云ふ問題は、今尙學者間に於て充分に解決せられて居らぬが、その最初の痕跡は紀元後第六世紀に於て之を認めるこゝが出来、又次ぎの世紀には多瑙河の南方即ち今の塞爾維地方に定居したらしく思はる。此の方面に於けるオソリチーである獨逸のヴィルト博士はその著巴爾幹(一九一四年出版)に於て次の如くに述べて居る。

南スラーヴ族が初めて巴爾幹半島に移住した時には、塞爾半族ミスローヴェン族との二種族に分れて居た。然るにスローヴェン族の一部は、非

アルヤ民族である蒙古人種と血液を混合した結果、今の勃牙利人なる一種族を作るに至つた。之に反し塞爾維族は、その住地を異にして居る所から、クロアト人とかウスコーク人とか、ボスニア人とか、ヘルツェゴヴィナ人とか、黒山人とか云ふ種々の稱呼を取るに至つたものゝ、別にその血液上に於て變化をしなかつた。

然るに吉野博士は「歐洲動亂史論」に於てクロアト人は、最初より塞爾維人と全然没交渉で發達した様に論じて居らるゝが、我輩の調べて見た所では、成程クロアシアと云ふ土地は、早くから埃匈國に屬して居たるも、塞爾維は土耳其帝國內に在つたので、政治上に於て兩國が久しく無關係であつた事は、事實である。併しながらその以前ヅシヤン大王が塞爾維大帝

國を經營した時には、クロアシアもその勢力範圍に屬して居たことが明白に史乘に記されて居る是で見ると博士の説の如く全く没交渉でも無かつた様である。それに又その後でも、文學上或は思想上に於て常に兩國民の間に密接の關係があつた事は、クロアシアの詩人が祖國の歌を詠じた時に塞爾維をも含みて言うて居るのに據つても明かである。現に南スラヴ語のナロード云ふ言葉は國民云ふ意味であるが、是にはクロアイト人もスロヴエン人もダルマシア人も塞爾維人も勃牙利人も總て含まれて居る。有名なる前世紀のスラヴの詩人ガイの如きは南スラヴの土地をば七絃琴に譬へて、その糸であるクロアシアやスラヴオニアや塞爾維や黒山國や勃牙利やなきが、その糸ごめが切れた爲めに音調が一向整はぬ様にな

つた。乍併若し元通りになれば、立派なメロヂーを發するこゝが出来ると言うて居る。

尤もクロアイト人と塞爾維人は、此迄兎角宗教上の關係から互に軋轢して居たのは明白なる事實であるが、是は何も塞爾維王國とクロアシアとの政治的衝突を意味するのでは無い。クロアシアやボスニアに住んで居る希臘教徒の塞爾維人と加特力教徒のクロアイト人特にその農民が常に相容れなかつたのに過ぎぬ。單に此の事實からして大塞爾維運動にクロアイト人が全部反對して居た様に判斷するのは、ちと理窟に合はぬ様に思はれる。現に吉野博士の所謂三國鼎立運動もその國內には多數の希臘教徒たる塞爾維人が住んで居るのであるから到底行はれぬ筈では無からうか。

此の事に就ては、英國の巴爾幹通バックストン氏が近著「戦争と巴爾幹」に於て次の如く説いて居る。

つい近頃迄奥匈國の「分裂し而して支配せよ」の政策によりて、塞爾維人ミクロアト人との間に反亂を起さしめる事が出来たのであつたが此の兩種族は非常なる迅速を以て民族上の自覺から互に相接近するに至つた。されば最近塞國首相バシツチが、吾人はクロアト人並に塞爾維人の爲に戦ひつゝあるを宣言したるに、クロアト人の首領株に顯著なる反響を與へたのである云々

而して又氏は戦後ボスニア、ヘルツェゴヴィナ二州は勿論クロアシア、スラヴォニア等の南スラヴ族の住地は、總て塞爾維王國の下に一統せしむ

る必要がある。蓋し是は彼等民族の渴望して居る所であるを論じて居る。尤も斯の様な議論を爲すものは氏ばかりで無い佛國や露國の論者中にも澤山ある。是に據つてもクロアト人ミ塞國人とが衝突して居たのがサラエオ事件を惹き起したる主なる原因であるを云ふ吉野博士の斷定はち無理かと思ふ。

○塞爾維の

塞爾維人の人種的關係に就ては、既に述べたが、是より少しくその國の歴史的變遷に就て語らう。

巴爾幹半島に於ける南スラヴ族の二大支族は、勃牙利人ミ塞爾維人ミであつたが、此の兩者は常に相競争して、時として前者が時としては後

者が交々半島の覇權を握つた。

塞爾維人は第八世紀に於て、基督教に化し、希臘教會に屬したが、第十世紀迄は東羅馬帝國に對して屬國同様の關係を持續して居た。然るに一〇四三年に至りて初めてその羈絆を脱し、一一六五年にネマンヤ朝なるもの起り、一二二二年に羅馬法王ミビザンツ皇帝に依り、ツァール即ち皇帝の稱號を承認せられた。

その後十字軍の爲にビザンツ帝國が半瓦解し、勃牙利が殆ど無政府同様の狀況に陥つた時に、會々塞國に一大英傑起り今の塞爾維を本據とし、殆ど半島の全部を併呑した。是れぞ世に有名なるステファン・ツシヤン(在位一三三一年乃至一三五五年)である。彼は尙進んで君府を略取せんとした

るも不幸にして土耳其人がガリスボリス上陸に先だつこゝ一年、即ち一三五五年十二月二十日、市の攻圍中ヤムボリに於て熱病に罹り不歸の客と爲つた。若し彼をしてその天壽を完うし、ビザンツ皇帝に代つて君府に居城を構へユスチニアンの遺法を傳へ、回教徒の侵入を防禦し得たならば、世界の文明史上に一大變化を來さしめたであらう。此時彼の部將の一人は、「此の帝國は終に何人の手に歸するであらうか」と歎息したとて傳へられて居るが、實に爾來六世紀に亘りて此歎聲は半島の歴史を語るものである。却説ツシヤン大帝の死と共に、塞爾維帝國の全盛は茲にその終りを告げ内訌の爲めに國勢日に傾き衰亡の域に陥つた。その後ヴカシンなるもの塞國の帝位に即きビザンツと同盟して土耳其と戦ひ、サロニカを占取したる

も、一三七四年土帝ムラッド一世ミアドリアノール附近のマリツツア河畔に於て戦ひ、破れて戦死を遂げた。

クネヅ・ラザールなるものその後を襲うたが、到底單獨にて土耳其に當る能はざるを悟り、匈牙利及び勃牙利と同盟を結ばんとした。然るにムラッド帝は反間を放ちて之を探知し、直に大軍を率ゐる破竹の勢を以てフィリポポリス、ソフヒア、及ニツシユを略し、南の方舊塞爾維の地に向つて轉進した。茲に於て史上に有名なるコツソヴオ、ボリエ（一名アムゼルフエルド）の決戦が行はれた。

コツソヴオの戦ひは、實に、世界史上最大決戦の一として認むべきである。蓋し此戦ひの結果、巴爾幹半島は遂に土耳其の手に歸し、回教的東洋文明は、基督教的西洋文明に代り五世紀に亘りて、東歐にその根據を構ふるに至つた。

○コツソヴオの決戦

今其戦況の概要を記せば、一三八九年六月十六日塞國帝ラザールはボスニア黒山國及アルバニアより多數の援兵を得たので、自ら之に將を爲り、土帝ムラッド一世に向ひて開戦した。此時土耳其軍中には敵に降服したる勃牙利の王子初め基督教徒の將帥も亦多く加はつて居た。

其日の佛曉コツソヴオの平野に相對峙した兩軍が互に接近しつゝあつた際、ラザール帝の女婚ミロツシユは二名の貴族と共に土耳其軍の陣中に來りて土帝に面謁を求めた。ムラッドは、必定内應の爲に來りたるものと思

ひ心置なく引見した。ミロツシユは土帝の足に接吻の禮を行はんとするの
様子を示したので、ムラツドは少しく其體を前に屈めた。するに此時早く
彼の時遅くミロツシユは忽ち躍りかゝりて七首にて土帝を刺した。致命傷
を受けたる土帝はその日の夕頃迄生き存らへた。話頭一轉戦況は其日の午
前中塞軍の方に有利であつたが、日中に至りラザールの甥ブランコヴィツ
チは部下一萬二千を率ゐて敵に内應した。仍てラザールは忠實に残れる兵
士と共に最後迄力戰奮闘したが、誤りて乗馬と共に溝中に陥り、敵の爲め
に難なく捕へられた。而して其夕刻將に息を引き取らんとしつゝあつた土
帝ムラツドの面前に於てラザール初めミロツシユ其他捕虜を爲れる有力な
る塞國の貴族等は盡く死に處せられた。

れ此敗戦の爲塞國の獨立は約四百年の間全く封ぜられて了つた。

斯くて塞爾維の領地は土帝ムラツド一世の後を繼げるバエジツドにより
て、ラザールの遺子ステファンミブランコヴィツチに分與せられ、土耳
其に朝貢するこゝとなつたが、其後塞爾維人は屢土耳其の羈絆を脱せんこ
したるも、成らず遂に一四五八年土帝モハメツド二世によりて滅ぼされ、
爾來土耳其帝國の一州を爲つた。

然るに土耳其は軍事的に此地を占領せるも、深く内治に干渉せず、其言
語宗教及風俗はその儘に之を維持せしめた。其後一七一八年七月ボシヤレ
ヴァツツの平和によりバナート並にボスニアの大部と共に墺地利の治下に
立つこゝを爲つた。然るに墺國の政治は塞爾維人の同情を失ふに至つた

が、一七三九年の戦ひに於て塙軍破れ、塞國は再び土耳其により奪還せられた。其後塞國民は土耳其の暴政に苦しみ、屢叛亂を企てたが、遂に十九世紀の初年に至りカラ、ジョルジの名を以て知らるゝペトロヴキツチなるもの、クルグエヴァツツ附近のシユマヂア森林に據り其他の養牧民と共に叛旗を擧げ、獨立を宣言した。而して一八〇四年九月チエブリア附近の戦ひに於て土耳其を破り、越えて一八〇七年二月ベルグラードを占領した。是ぞ塞爾維人の土耳其に對する獨立運動の序幕であつた。

○塞爾維の獨立運動

塞爾維獨立運動の序幕を演じたジョルジ・ペトロヴキツチは常に黒色の外套を着して居たのでカラ(即ち土耳其語の黒の意)ジョルジの名を得たの

であるが、其祖先は佛國人である云ふ説もある。一七八七年に塞國の一農家に生れ、幼にして父を失ひ貧苦の間に成長したので、目に一丁字も無かつたが、生れながらにして人に長たるの器を具へて居た。コンマジアの森林中より起り、土耳其に向かつて叛旗を翻し、遂にベルグラードを占取して、塞國の獨立を宣言した。されど絶大なる土耳其には到底永久に敵抗し難いので、當時武威歐洲を震撼したる那破翁一世に向つてその援助を懇願したが遂に成らなかつた。

此時塞爾維國民中窃に心を露國に寄せ、其宗主權を認めて保護を仰がうと主張するものがあつたが、カラ・ジョルジは愛國の志士と心を協はせて極力之に反對し、全く獨力を以て土耳其に抵抗した。するに露國は之を喜

ばず、一八一二年五月土耳其ミブカレスト條約を結び、て折角塞爾維の愛國者が血を流して漸く贏ち得たる獨立をば一朝にして水泡に歸せしめた。蓋し此條約の結果塞爾維は大赦と自治とは許されたるも、尙土耳其の貢國として繼續し、其城塞も依然土耳其の手に歸する事となつた。

土耳其は又其翌年兵を派して再び塞爾維を元通りに征服せんとしたので、カラ・ジョルジは死を決して防戦したが、衆寡敵せずして遂に一敗地に塗れ、纔に身を以て墮地利に遁れた。

斯くて憐れや塞爾維は再び土耳其の治下に塗炭の苦しみを受けんじした。然るにカラ・ジョルジに代つてミロツシユ・オブレノヴキツチなるもの一八一五年同志を糺合してマチュヴァの平野に據り二方より進み來れる土

耳其軍の撃つて大に之を破り、再び土耳其の羈輓より脱するこゝを得た。

一八一七年の十一月ミロツシユは國民に推されて塞國公となつたが、一八二九年九月のアドリアノーブル條約により土耳其も遂に彼を國公として承認した、その後彼は善政を布き、大に見るべきの治績を挙げたが、漸く心驕り專横の行ひありたるが爲人心を失ひ遂一八三九其位を長子ミランに譲りて第二子と共に故郷を去つた。然るにミランは其後三週間を経て病死したので、其幼弟ミハエル其後を繼ぎたるも、彼も亦父と同じく人望無く叛亂の起りたる爲一八四二年墮太利に遁れた。同年九月ベルグラードに召集せられたる國民大會は全會一致を以てカラ・ジョルジの子アレキサンデル・カラ・ジョルジヴキツチをば國公に選立した。斯くて茲にオブレノヴ憐

キツチ家ミカラ・ジョルジヴキツチ家ミの公位繼承の争ひを起すの素因を爲すに至つた。アレキサンデルは即位以來銳意行政の改革を行つたので、塞國は一段の發達を遂げたるも其後民心を失ふに至り、議會は彼の廢位を宣言し、一八五八年當年八十歳であつたミロツシユ・オブレノヴキツチを再び迎立した。然るにミロツシユは翌年の九月に世を去り、其子ミカエル三世が其後を襲ふことなつた。

斯くの如く世々の塞國國公はその終りを完うしたものが殆ど無なつたが、新公ミカエルは果して又如何なる運命に遭遇したであらうか。

○塞國公ミカエル三世とミラン四世

一八六〇年に兄のアレキサンデルの後を繼いだミカエル三世は、多年西

歐に遊歴して高等の教育を受け、識見材幹共に卓絶せる一英物であつた。父のミロツシユが東洋的暴主の風があつたのに反して、彼は歐洲的君主の態度を具へ、極めて平民的であつた。例へば彼が議會に臨み議員等と呼ぶにも「我兄弟よ」ミ云ふ様な親しげなる言葉を用ゐた。夫故人望は先公に異りて頗る高かつた。加之又彼は憲法の改正を行ひ、新に數多の法律を制定し、初めて義務兵制を採用して國民軍なるものを設置し、收税法に改善を加へ、著しく國庫の收入を増加せしめた。斯くて彼は一大光彩を塞爾維史上に放ち其國家の獨立的基礎を鞏固にした。然るに之が爲土廷の反感を招くに至つたが、夫よりも他に彼の一身をして悲運に陥らしめたるものがある。即ち彼の新政を憚はなかつた頑冥なる國粹主義者がカラ・ジョルジ

ヴキツチ家のものに教唆せられてオブレノヴキツチ家に對して陰謀を企てた。(一説には其背後には露國が控へて居た云ふ)時は一八六八年の六月十日の事であつたが、偶好天氣であつたのでミカエルは其叔母のアンナと娘のカタリナを伴ひて離宮のトプシデル公園に散策を試みつゝあつた。すると突然木蔭から四人の兇漢が現れ出で、各手にせる短銃を以てミカエル初め叔母及び其他を銃殺した、ミカエルには男子が無かつたが、人民は深く彼の變死に同情を表し、オブレノヴキツチ家に於ける唯一の男子であつた當時巴里に留學中のミランをば選定して其後を繼がしめた。此時ミランは僅に十四歳であつたので、三人の攝政が國政に參與するこゝとなつた。然るに政府の勢力が極めて薄弱であつた爲反對黨は議會に或は新聞紙

上に於て切りに政府を攻撃し、之が爲内閣の更迭が頻繁に行はれたが、一八七一年ミラン四世が親しく政權を執り、大に自由的制度を布き、國民教育にも力を用ゆるに及び政界も漸く靜謐に歸した。

一八七四年の晩秋ヘルツェゴヴキナの基督教徒が叛を擧げたが、其翌年に至りボスニア其他の各地にも傳播し勢ひ頗る猖獗を極めた。ミランは幼年の時巴里に於て生長した爲めに佛國人の性格の長所と共に短所を兩ながら有して居て、兎角感情的の人物であつたが此機に乗じてボスニア、ヘルツェゴヴキナ及舊塞爾維をば併合し所謂大塞爾維主義を實行せんことを欲し、一八七六年七月土耳其に向つて戰を宣言した。すると黒山國亦之を氣脈を通じて起つた。

此時ミランは露國のツエルナエフ將軍(休職)を迎へてその司令官としたが、露國より應援の爲に來れる義勇兵は約五千人に達し、塞爾維及び黒山軍は總勢十二萬六千を算した。

○ミランと塞爾維王國

斯くてミラン四世は一八七六年六月土耳其に向つて戦ひを開いたが全く失敗に終つた。するに其翌年の四月露國は土廷が列強の提出せる行政改革案を實行せざるを名こし土耳其に戦を宣し、羅馬尼をば共に起たしめ、尙塞爾維をも誘うて之に参加せしめんこした。然るに最初ミランは前年の戦敗に懲りて容易に動かうこしなかつたが、土將オスマン・パシヤの死守せるプレヅナの要塞が陥落し、露軍の旗色が大に振ふに至り、同年十一月遂

に起つて土耳其軍を攻撃した。一方露軍は破竹の勢に乗じて、アドリアノールに迫り、遂に一八七八年三月三日土耳其をしてサンステファノーの協約を結ばしめた。而かして此條約により、露國は土耳其をして勃牙利に殆どマヤドニアの全部並に東ルメリアの地を割與せしめたるも、塞國は多大の犠牲を拂ひたるにも拘はらず、其獲得したるものは甚だ勃牙利に比して僅少であつた。之が爲め塞國は露國に對して不平の念を懷くに至つた。するに此時列強時に英國は露國勢力の巴爾幹を左右するに至らんこするを見て大に之を恐れ、極力大勃牙利の建立に反對し、伯林會議を開き、露國をしてサンステファノー條約を破棄せしめた。而して此際塞國は奥國の援助を得て、列強に其獨立を承認せられ、ニツシユ、ピロツト及レスコ

ヴァツツ地方を新に獲得した。仍て同年即ち一八七八年八月一日ミランは正式に塞國の獨立を宣言し、國公として「殿下」の尊稱を取るに至つた。乍併塊國の援助は決して無報酬では無かつた。其條件として塞國は塊國に有利なる通商條約を結び、君府に至る鐵道を敷設し、又サロニカに出づる塊國の道路を保留し置くことを約した。尙是よりも塞國に取りての一大苦痛であつたのは、塊國が伯林條約によりて得たるボスニア、ヘルツェゴヴィナ兩州の占領權を承認せねばならぬ事であつた。此結果塞國に於ける急進黨をして排塊熱を高からしめた。特に其首領であつた時の首相リスチツチは、極力排塊的政策を取り、塊國との通商條約並にその他の盟約履行を拒絶せんとした。然るに一八八〇年十月塊國は強硬なる通牒をベルグラード

政府に送りて、リスチツチ内閣を顛覆せしめた。

此に於てミランはリスチツチの反對黨なる新進歩黨をして内閣を組織せしめ一八八一年に塊國と通商條約を結び、又鐵道敷設の爲め佛國銀行との協商を遂げた。仍つて塊國は之に對する代償として一八八二年三月六日にミランがミラン一世と稱して王號を取り、塞國を王國として宣言したるに際し、直に之に同意を表した。

其翌年の十月急進黨の暴動が起つたが、政府は暴力を以て之を鎮壓した。其時難を門外に避けたる其領袖こそ誰あらう、今日塞國政界の大立物として其名の世に知られて居る首相バシツチ其人であつた。

斯くの如くミランの親塊的政策に對して、國內不平を懷くものが尠くな

かつたが、兎に角彼の治世間に於て塞國は獨立の王國に昇進し、其前途に曙光を放つに至つたので、多數の國民は彼に謳歌した。然るに偶彼は一大失態を演じ、之が爲遂には自ら其王位を去るの已むなきに至つた。

○波瀾に富める塞國王ミラン一世

伯林條約の結果、二つの勃牙利國が成立した。それはさ云ふ次第であるかき云ふに、土帝の主權の下に立つ所の勃牙利公國と、土耳其の自治州としての勃牙利即ち東ルメリア州の二つが出来たのである。素よりこの様な状態で何時迄も繼續すべき道理が無いから、早晚勃牙利公國が東ルメリアを併合するに相違なからうきは世人の一般に豫想して居た所であつたが、果せるかな勃牙利は一八八五年の九月にその併合を宣言した。依つて歐洲

列強は此の問題に就て互に意見の交換を行ひつゝあつたが、するに塞王ミラン一世は是をば伯林條約の違反であるを稱して勃牙利に向ひ、強硬なる抗議を提出し、更に勃牙利匪徒の暴行並に犯罪人庇護等の罪狀を數へ立てて、同年の十一月勃牙利に對する宣戰の口實として。何故にミランが斯かる舉に出でたかと言ふに、勿論勃牙利の強大なるは塞國の存立を危くするの恐れあるが爲めでもあつたらうが、その實國內の親露派なる急進黨が勢力を一身に集むることが出来ぬ所から、當時露國が孤立の地位に立てるの虚に乗じ、獨兩國の排露政策に支持せられて外交上の一大成功を收め、以て反對黨の撲滅を圖らうとした。

斯くて遂に塞勃兩國間の開戦を見るに至つたが、最初戦運は塞軍を寵し

たるも、後東ルメリアより優勢なる勃牙利の援軍が到來したので、塞軍は連戦連敗の悲境に陥り、遂にスリヴニツツアを拋棄し、ピロツトも亦敵の手に委するの已むなきに至つた。此危機に際し其の後援たる奥國が之に干渉したる結果、塞國は辛うじて城下の盟を講ずるに至らずして、戦局を結ぶこゝが出来た、而して一八八六年三月ブカレストの和約により勃牙利は塞國並に列國により東ルメリアの併合を承認せられた。

然るに、ミランは此戦敗の結果同國に於ける信用地に墜ち、之が爲め一時位を退かうと決心したが、聽て又心を取直し、曩に叛逆罪に問ひたる急進黨員に向ひて大赦を行ひ、而もその首領なる前首相リスチツチに命じて急進並に自由兩黨より成る聯合内閣を組織せしめた。その後幾何もなくし

てその内閣が倒れたので、彼は急進黨より成る内閣を成立せしめ、一八八八年十二月に輿論に基ける新憲法を制定し只管人心の收攬に努めた、然るに新憲法の結果純然たる政黨内閣と變じ、政府は一に議會に依り制御せらるゝ事となつた。此年又ミランは曩に露國より迎へたる王妃ナタリエが兎角政治上露國の利益を圖るので之と不和を生じ、遂に之を離縁した。之が爲め痛く親露派の意を損ずるに至つた。するにミランは一八八九年三月即ち新王門建立の七年祭に突然王位をばその子アレキサンデル一世に譲り、自分は再び此國に歸らざるを盟ひて外國に向つて去つた。

此時アレキサンデル一世は、まだ十三歳の少年であつたので、リスチツチとプロチツチ外一人が攝政となつた。然るにその後間もなくプロチツチ

が死去したので、霸氣満々たるリスチツチの獨り舞臺となり、彼は殆んど君主と異らざるの威權を振ふに至つた。

○ミラン王の最期とアレキサンデル一世の失政

新王アレキサンデルは攝政リスチツチの專横に堪へなかつたので、竊に腹心の者と謀りて父のミランをば外國より招還した。そこでミランは一八九四年に元帥として歸國し、巧に反對黨なる急進黨を懐柔し、又一旦離婚したるナタリエをも復縁して親露派の意を迎ふるに苦心した。

然るに偶一八九九年クネゼヴィツチなる者カラ・ジヨルジヴィツチ家の一味と共謀してミランをば暗殺せんとしたが成らなかつた。するにミランは之をば最上の口實として急進黨並に親露黨の撲滅を謀つた。此の結果佛

國のドレーフェースと同様な一大疑獄が起り、一般人民は大にミランを怨むに至つたが、王が軍隊を己の味方に引入れて居たので、如何にもするにこそ出来なかつた。

話頭一轉アレキサンデル一世は、自分よりも十二歳年上なるドラガ・マシニコ呼ぶボヘミアの一技師の寡婦の容色に迷ひ、之と結婚を約しやうとした。然るに此のドラガなるものは嘗て維也納に於て賤業を営める事があったが、その夫が變死したる後、ナタリエ王妃の官女としてベルグラードの王宮に入り込んだのである。されば素より父王ミランが之を許す筈はなかつた。そこでアレキサンデルは偶一八九〇年の夏ミランが保養の爲めカールスバードに赴きたる其不在中に、公然ドラガと結婚を遂げた。外國

に於て之を聞きたるミランは、大に怒り、直にアレキサンデルとの縁を絶ち、元帥の職をも辭し二度に歸國せざるに決した。するに不幸なる彼はその翌年の二月維也納に於て病に罹り不歸の客となつた。

彼に又前後して塞國政界の大立物であつた攝政リスチツチも亦死去した。仍りてアレキサンデルは全く自由の身となつたが、親から政を執るに及び、大に政治上の方針を改め、一層自由主義を標榜し、一九〇一年四月に新憲法を制定し、努めて美政を布いたので、何日しか結婚上の不評判も、人民から忘れられてしまつた。

然るに王妃ドラガに子が無かつたので之に乗じてカラ・ジョルジヴィッチ家の一味が又もや陰謀を企つるに至つたが、此時黒山公ニコラスは最も

近親の間柄であるので、その第二子のミルコをしに之に繼がしめ、而して黒塞兩國に王家の下に結合しように圖つた、然るに又アレキサンデルが極力之に反對しつゝあつた際に、一方ドラガは自分の弟のルニエヴィッチをば、その後嗣め様として運動したが、然るに人民は斯かる成り上り者を國王として戴くを欲しなかつたので、大に王室に對して不定の聲を放つに至つた。

それ以前後して王妃が懷妊したと云ふ報道が傳へられた、するに王は憲法を改正してその男女に拘らず後嗣をすることが出来ることに定めた。然るに此の時露國から派遣せられたる醫師は決して懷妊で無いと斷言したので、宮中では非常に狼狽した。此の様な事が續發した爲め、王室の威信は

益失墜した。その後間もなくして一九〇二年に一大暴動がベルグラードに勃發した。仍りて王はマルコヴィツチ將軍に命じて主として軍人より成る内閣を組織せしめ、兵力を用ゐて暴動を鎮壓し之と同時に又もや急進黨に對して最後の打撃を加へ様とした。之が爲め端なくも一大革命を誘致し、アレキサンデル並に王妃をして無慘なる横死を遂けしむるに至つた。

○塞國王室の一大悲劇と現王ペーター一世

一九〇三年六月十一日の深夜午前二時半頃二個聯隊を率ゐたる一團の軍人は突然王宮に闖入して、アレキサンデル王並にドラガ王妃を殺害し、此外王妃の兄弟二人を初めとし、首相マルコヴィツチ、陸相パウレヴィツチ及侍從武官長等をも刺殺し、内相には重傷を負はした。

斯くて彼等は拂曉に至り、王及王妃が革命の結果、死去したる旨を報じたるに、ベルグラードの市民は、之を聞き悲觀するかと思ひの外、戸々國旗を高く掲げて歡喜の意を表し、寺院は感謝の祈禱を捧げ、新聞紙は舉つて革命の成功を祝した。而も王及王妃の遺骸は普通の棺に收められて、恰も罪人同様の埋葬を行はれ、誰一人會葬する者も無かつた。是云ふのは畢竟アレキサンデル並に王妃が自ら招いた禍に外ならない。さりて又當年僅に二十六歳の青年でもあり、その失政とても左程大なものでも無かつたのに苟くもその君主が斯かる悲惨の最後を遂けたるを目前に見ながら、一掬の涙を流さざるのみか、却つて祝意を表するが爲めに、同夜市民は盛んなる舞踏會を催したと云ふに至つては、言語道斷の至りである。此は又

一面に於て塞爾維人の國民性の如何を語ると思ふ。

此の悲劇は平素王に對して不平を懷き居たる軍人によりて演ぜられたるものゝ、その實その主たる陰謀者かカラ・ジオルジヴィッチ王家の一味も、急進黨も自由黨等の共に親露主義の色彩を帯びて居たる者であつた事は、公然の秘密として普く世に知られて居る。

革命後間もなく新内閣は自由黨の首領アウ阿克モヴィッチの下に明白に陰謀者の嫌疑を有する急進黨等によりて組織せられ、而して直に召集せられたる國民議會は此の時ゼネジに追放中であつたアレキサンデル、カラ・ジオルジヴィッチの子をば塞國王として選立した。實に此の新王こそ今や亡國の悲運に遭遇し難をサロニカに避けつゝありと傳へらるゝペーテル一世

である。彼は一八四四年にベルグラードに生れ幼少の時より佛國に遊び、二十三歳にして佛國サン・シールの兵學校を卒業し、永く佛國軍隊内に在つたが、偶一八七〇年の普佛戰爭勃發した時、大尉として佛國軍に加はり殊功を奏した。又彼は外遊中深く露國の政治家と交はり、又その援助を受け、三十九歳の時黒山國の公女ヴォルガを娶り、二子を擧げた。斯る行懸から彼が心を露國並に佛國に寄せ、又一方奥國の二州併合を憤激し居たる塞國民によりて歓迎せられたのも、別に奇とするに足らぬ。

閑話休題此時歐洲列強は前記の兇變を聞き大にその無道の擧なるを非難し一時は盡くその公使をベルグラードより引揚げやうとしたがペーテルが急ぎ歸國し同年即ち一九〇三年六月即位式を擧ぐるに及び、露國は逸早

くその王位を承認した。するに塙國政府は素より心中此の政變を喜ぶ筈はなかつたが、露國の爲めに機先を制せらるゝを憂ひ、相次で之を承認した。するに獨逸も亦その例に倣ふたが、獨り英國は隱謀事件の明白にせられ、その連類者の處罰せらるゝ迄は之を承認せざる旨を告げた。然るにその後暗殺事件は遂に全く不問に付せられ、不承認の英國宣言も有耶無耶の裡に葬られてしまつた。

斯くの如くにして塞國はペーテル一世の即位と共に内外共に多事の時期に入つた。而して爾後十年間に於ける顯著なる事件に就て言へば民族主義の勃興に伴へる大塞爾維運動、マセドニア問題よりして一九一二年土耳其と衝突し遂に開戦を見るに至りたる事と又一方一九〇八年塙國のサンジ

ヤツグ鐵道計畫とボスニア、ヘルツエゴヴィナ二州併合の宣言に對して大に憤慨し、塙國と干戈の間に相見えんことしたる事等である。

○何故に塞國が歐洲大戰亂の火元と爲つたか

何故に塞爾維が今次歐洲大戰亂の發源地と爲つたかと言ふは、是は決して一朝一夕の故で無い。前にも述べた如く一九〇三年の悲慘なる革命の結果、親塙主義のオブレノヴキツ朝が顛覆して、其競争者である親露主義のカラ・ジョルジヴキツ朝が之に代り、爾來日に益露國と親近し、塙國と漸く疎隔するに至つた。而して又塞國は巴爾幹半島に於ける汎スラーヴ運動の中心と爲つた。されば一九〇八年塙國が青年土耳其黨の革命に乗じてボスニア、ヘルツエゴヴキナ兩州を正式に併合したのは、此新形勢に鑑

みた爲であつた。然るに此兩州は元舊塞爾維帝國の一部であつたので、塞國が常に之を自家の正常なる勢力範圍と認めて居た所である。故に塞國は大に奧國の舉を憤り、一時は奧國と開戦せんとするまでに至つたが、新王朝の保護者たる露國は當時日露戦争の創痕がまだ全く癒えなかつたので、獨逸の恫嚇に遭うて無念ながらも手を引き、駐露奧國大使に向つて塞國を援助せざる旨を聲明するの大屈辱を受けた。一方塞國は之が爲己むを得ず奧國の意に屈從して「ボヘ」兩州に對する野心の放棄を誓約したものと、何條此怨恨を忘るゝことが出来やう。此時以來塞國は切りに軍備を整へ、露國の援護の下にスラーヴ族なる黒山國並に勃牙利と糾合し、又希臘とも結び、茲に巴爾幹同盟なるものを組織した。而して最初先づ土耳其を

半島より驅逐してマセドニアを分割しやうと圖つたが、此目的は一九二一年乃至一三年の巴爾幹二回の戦争により、豫期以上の成功を遂げた。此に於て塞國民の意氣は益軒昂を極め、公然大塞爾維運動なるものを起し、ツシャン帝國再現の夢想を現實しようとした。するに奧國内の南スラーヴ族中にも民族熱に浮かされて、此の運動に参加するものが尠くなかつた。此の形勢を看取したる奧國政治家にして、又之を不問に附すべき道理が無い。されば既に巴爾幹戦争中に於て再度奧國は武力的威嚇を加へて塞國のアドリア海方面に出でんことを阻止し、更に國內に於ける大塞爾維運動を撲滅せんとするの政策に出でた。然るに此政策は單に塞爾維民族に憤慨せしめたばかりで無く、痛く露國政治家を首め汎スラーヴ黨の排奥的感情

を刺戟した。此結果已に巴爾幹戰爭中に於ても露境間の危機を見んこした事が一再にして止まらなかつた。爾來相互間の緊張は日に益其度を加へ、早晚其衝突は免れざるの形勢を示した。斯くてサラエヴォ事件は端なくも、境塞並に境露間の紛争を惹起し、遂に今次歐洲大亂の導火線と爲つたのである。

以上述べ來つた所のものは、普く世人の知悉する所であつて、別に斬新の説では無いが、吾輩は此見地の下に、汎スラヴ運動と汎日耳曼主義との衝突が、今次の世界的戰亂の直接原因を爲したものと斷定するのである何もクロアシアを中心とする所謂「三國鼎立運動」も大塞爾維運動との衝突に基因するものでは無からうと思ふ。特に故境國皇儲フェルヂナンドが

此三國鼎立運動に賛成したので、大塞爾維黨が之を怨んで暗殺したのである云ふ説の如きは何しても信ずることが出来ぬ。

○地理上より觀たる塞爾維王國

巴爾幹戰爭以前の塞爾維王國は、北緯四十二度二十六分乃至四十四度五十九分(我北海道の南部と略同緯度である)東經十九度十八分乃至二十二度五十二分の間位にして、其面積は四萬八千五百八十九平方吉米であつたが戰後其南方のノヅキバザール及コツソヅオ間(即ち一名塞爾維地方)を獲得し、その結果八萬七千三百五十八平方吉米の面積を有するに至つた。

地勢に就て言へば、純然たる山地であるが、概して南より北に向つて傾斜して居る。勃牙利との天然の境界を形成するスタラ山は二千〇三十四米

突の標高を有し、南方にはゴルヤク山がコツソヴオ州との境界を成し、其高峰が二千一百米突である。又西方にはゴルヤ山ヤヴオロ山が各一千七百米突の標高を有してノヴキバザールの境界を成して居る。河流は多惱河ミザーヴェ河を除きては、舟楫に便なるものが無いが、唯ドリナモラヴァの兩河は治水法にして其宜しきを得たならば、舟航に適せぬも限ら無い。多惱河にベルグラードよりチモツク河との合流點に至る迄の間が塞爾維の北境を形成して居るのであるが、此部分の多惱河は、河幅も水深もが場所によりて大なる異ひがある、而も所々に島や洲があつて水勢の又急なる所がある。ベルグラード附近は河幅が六百米突であるが、下流には殆ど千五百米突に達する所がある。又セメンドリアミバジアスとの間オストロ

ーフ島附近の如きは二千五百米突に達して居るに反してブリグラダ峽谷附近は僅に百十七米突に過ぎぬ。

水深はベルグラードに於て三十五米突であるがブリグラダ峽谷に於ては五十一米突に達して居る。河水の速力はベルグラードミバジアスとの間に於ては平均一秒間に一、三乃至一、五米突でブリグラダに於ては五米突である。

塞爾維の國境に於ける多惱河は、常に其沿岸の風景が他の流域よりも一層佳良なるを以て知られて居るのみでなく、羅馬時代の遺跡や耶蘇教徒の回教徒の古戰場などが諸所にあるので有名である。

ザーヴェ河は塞國に取りて最も重要な河流であるが、ラチャよりベル

グラトド附近の多惱河に流出する地點迄が奥匈國との境界を成して居る。此流域は廣き平原であつて處々に沼澤がある。河流は頗る迂曲し、其幅は百乃至四百米突で水深は概して淺く、盛夏の候にはベルグラードミシツセツクミの間の汽船の交通の絶ゆるのを常とする。速力は多惱河よりも緩慢であるがその沿岸は數次氾濫し、之が爲めその地方は熱病が流行する。

此外重要な河流はボスニアと塞國との境界を成して居るドリナ河と又國內を貫流するモラヴァ河である。溪流は非常に多いが、皆急流で一向舟行には適せぬ。されど水力利用には最も妙である。

風景の明媚なる點に於ては、巴爾幹第一として推されて居る。されば塞爾維人が概して愛郷心に富んで居るのは、單にそれが祖先の地であること云

ふばかりでなく、其風景の佳良なるが爲である。故に塞國の俚諺にも「世界を周遊したる者は必ず再び塞爾維に歸り來る」と稱して居る。

伊太利や佛蘭西の南部或は西班牙なども同緯度に位して居るが、地中海の海洋的氣候を受けずして寧ろ大陸的氣候に屬して居る。是は地勢が北面して一般に傾斜し又海上より遠ざかつて居る爲めである。一月の平均溫度は攝氏の零下二度で、七月の平均溫度は二十五度である。雨量は一年間非常の差がなく、平均の雨量は六百九十ミリメートルである。氣候は耕作物に適し従つて物産は豊富の方である。

尙是より塞爾維人の國民性やその生活狀態等に就て説く積りであるが、茲に塞爾維民族の分布を比較的最近の統計によりて左に掲げ置く

巴爾幹半島

塞爾維

ノヴキバザール及コツソヴオ州

ユスキユーニア

マセドニア

黒山國

以上巴爾幹半島内

ボスニア及ヘルツェゴヴィナ

クロアシア及スラヴオニア

ダルマシア

イストリア

匈牙利(バナート、パチユカ、パラニア等)

以上換匈國內

七〇

二、七五〇、〇〇〇

四五〇、〇〇〇

二八〇、〇〇〇

三〇〇、〇〇〇

二六〇、〇〇〇

一、七九九、二一〇

二、二七〇、〇〇〇

六二四、〇〇〇

一五五、〇〇〇

六七九、〇〇〇

合計

(此内加持力教徒)

九、六五六、二一〇

二、九一五、六〇〇

○塞爾維人の國民性

塞爾維民族はスラヴ民族中の最も純血なるものとして知られて居て、蒙古人種の血液を混へて居る勃牙利人とは自ら體型を異にして居る。即ち彼等は概して他の巴爾幹民族よりも、丈高く頭大きく、頭髮は黄金色が茶褐色である。特に此のスラヴ的特徴は、塞爾維人よりも、寧ろ黒山人やボスニア人に於て多く之を見るのである。是は如何なる理由であるかと言ふに、塞爾維の北部或は平原地方のものは、古來屢他の民族の爲に征服せられ、多少その血液を混合したが、之に反して黒山國やボスニアの山間地方

のものは克くその獨立を維持し、スラヴ固有の特質を失はなかつた故である。

その國民性に就て見るに、塞爾維人は特に愛郷心に富み、家族を重んじ、親孝心であり、一般に長者を尊ぶの風がある。而も不羈獨立を愛し、頗る民主平等主義である。故に塞爾維には貴族門閥を稱すべきものが無い。唯官吏と軍人が上流の地位を占めて居て、別に中流社會を稱すべきものが無い。その最多數は皆農民である。此の外無論商人もあるが比較的少數であつて特に職工なるものに至つては甚だ尠い。而して又富豪と大地主を稱すべきものが餘りに多く無く、大體に於て貧富の差が平均して居る。彼等は又頗る勇敢であつて、尙武的なるを以て知られて居る。現に今

度の戰爭が能く之を證明して居る。即ち一年有半にも亘りて優勢なる敵軍に當り、惡戰苦闘を重ねつつも、克く最後迄も戦うたのであるが、此の點に於ては、英佛軍なきの及ぶ所では無い。従つて彼等には、今尙野蠻の風を脱せぬ所がある。

彼等の美點は外客を好遇するの一事であるが、その弱點を言へば一般に怠惰な事であるが、勞働は多く婦女子の手に委せられて居る。而も又頗る迷信的であつて、無智文盲のものが甚だ多い。

中世紀の全盛時代には、却々文學なきが盛んに行はれて文豪なきも多く出たが、今日では、その面影が無い。乍併彼等は好んで政治を語るの風あり、又趣味としては詩歌音樂及び舞踏を好み、又常にスラヴを稱する氏

神の鎮守祭を行ふのであるが、此日には盛んなる饗宴を張る習慣になつて居る。塞爾維には大なる都會が極て尠い。首府のベルグラードなごは人口僅に九萬に過ぎぬ。之に亞ぐ第二の都會のニツシユの如きも、二萬五千でその他は皆二萬以下である。却つて巴爾幹戰爭の結果新たに占領した地方に比較的大きな都會がある、例せばモナスチールが六萬でユスキューブが四萬七千である。彼等は多く村落に住して居て、主として農業と牧畜に従事して居る。ベルグラードは一見歐洲風の立派な都會であるが、その他の市邑は殆ど村落同様で純然たる農民國の状態を示して居る。

○塞爾維の前途

塞爾維が一八七八年の伯林會議によりて其獨立を承認せられ、尋いで一

八八二年王國と爲つた以來、長足の發達を遂げたことは、獨立當時の歲入が僅に二千八百萬法に過ぎなかつたのに、今日では實に二億一千四百萬法（一九一四年度豫算）を計上するに至つた事實に徴しても明白である。特に最近巴爾幹戰爭後著しくその領土を擴大したと同時に、急激なる財政の膨脹を見るに至つた。

然るに又一面に於ては、獨立以來數度の戰亂や、歳費激増の爲め、年々國庫の缺乏を告げ、其結果今日では外債の總額六億七千萬法に達し、毎年之に支拂ふ利子のみでも歲入の二割七分に相當するが如きの状態となつた。僅々四百萬の人口を有する國家としては、其負擔が餘りに過大である。謂はねばならぬ。夫も商工業の發達が之に準じて有望であるならば兎に

角。今日の處何れも皆頗る幼稚であつて、唯農業のみを以て立ち、之を以て唯一の富源として居る。然るに一方關稅戰爭に於ては常に奧匈國の爲に左右せられて貿易上の自由を奪はれ、加ふるに又四方皆陸を以て圍繞し、一の海港をも有して居ない。

斯くの如き境遇であつて見れば、經濟上の發展の如きは容易に之を望むことが出来ぬ。是ぞ塞國政治家がアドリア海上に其出路を求むるの必要を感じ、大塞爾維主義を執るに至つた所以である。

然るに又翻つて其内政の状態を視るに、由來兩王朝の政權爭奪に一方親露親奧兩派の軋轢によりて、内訌の絶える日なく、前後八人の王中ベルグラードの王宮に於て平和の最後を遂けたものは、僅に二人のみであつ

て、其他は或は暗殺せられ或は外國に出奔し一人として其終りを完うした者が無い。其狀恰も日露戰爭以前の韓國に酷似して居る。然るに一九〇三年の革命後即ち現國王ペーテル一世の治政間に至り、國民的自覺の勃興と共に、漸く健全なる發達を遂けつゝあつた。斯くて偶巴爾幹戰爭により俄に其版圖を擴張し國威を發揚するに同時に、國民の意氣も亦大に振ひ。其前途に一道の曙光を放つに至つた。然るに不幸にしてサラエヴォ事件より奧國と戰端を開きたる結果、目下の如き悲境に陥ることとなつた。

塞爾維の前途は果してどうなるであらうか、這是今日に於て豫想することは出来ぬが、少くも聯合軍にして最後の勝利を博せぬ限り、戦前の状態に復することは到底不可能である。噫弱國は遂に強國の犠牲ならねば

ならぬであらうか、想うて茲に到れば、轉た塞國民の爲暗涙を禁じ得る次第である。

第二章 黑山國

○健氣なる黑山國

世界で一番小さい獨立王國と言へば、最近塞爾維と同様な運命に陥つた黑山國である。巴爾幹戰役後その領土を二倍大にしたものゝ、尙我が四國にも及ばない。而して人口も之に伴うて殆ど二倍に増加したことは言へ、それにして四十五萬を超えぬ。特にその首府の如きは、今尙僅に人口五千餘のほんの一寒村である。されど一九一〇年以來王國を爲り。各國をも使

臣を交換して居る立派な獨立國である。それに現王ニコラス一世は當年七十五歳の老體ではあるが、現に此度の戰爭にも親から陣頭に立て將士を指揮したと云の程の英邁な君主であつて、その王女のヘレナは伊國皇帝ヴィクトル、エマニユエル陛下の皇后でもあるし、又二人の王女は露國ニコライエヴイツチ太公家の兄弟に嫁れて居る。斯の様に有力なる歐洲第一流の帝室に近親の間柄であるから、たゞひ國は如何に貧弱でも、自重して居る風が見える。又その國民に就て見るに、同族なる塞爾維人は違つて、餘程貴族的の傾向であつて、農民的平民主義ではない。特に又スラヴ民族中最も勇敢なるを以て世に聞えて居て、古來唯の一度も外敵の爲めに占領せられたことが無い。尤も今度の戰爭では遂に獨逸軍の爲めに破られて、

その首府も陥落したが、然れども僅々五六萬の兵力を以て最後迄踏止まつて防戦したその健氣なる點に至りては、實に嘆賞を値する。

そこで極くざつこ此國の地理と歴史とに就て語らうと思ふが、全體此國は天然の上から見るに餘りその恩恵に浴して居ない方である。塞爾維に比べるに又一層峻しき山地であつて、その一小部分はアドリア海に臨んで居るが、海岸は概して絶壁を成し、山脈が之に密接して横はつて居る。唯アンチヴァリ港ミヅルチグの附近のみが稍平坦であるが、更に一の良港として視るべきものが無い。國內には二つの大なる山脈が奔りて居るが、その一つはチルナ・ゴラと呼ばれ即ち黒き山の意で、モンテ・ネグロの國名は是より出でたのである。是は海岸に沿つて奔りて居るが、他のブルタ山脈は

大陸に向つて奔り、共にゼタ峽谷を形成して居る。チルナゴラは海拔五百乃至五千米突の所謂カルストの高原であつて、その北部の方が高いがブルタは千七百乃至千八百米突のアルプス的高原より成つて居る。

河流の主なるものはモラツツア河であつて、水源をストーより發し、ゼタ河をその右岸に入れてスクタリ湖に注入する。下流は河幅が六十米突ばかりもあるが多くの地點は跋涉することが出来る。

スクタリ湖の北部は沼澤を成して居るが耕作に適する沃野が之に接続して居て、舊黒山國中人口の最も多きボドゴリツツア市(人口一萬四千)がその附近に在る。乍併此の湖畔の地は熱病が常に流行して人の健康に適しない。

地味はブルダその他の河谷に於て、肥沃であつて、耕作が行はれて居る。又ブルダ峽谷は森林に富んで居るが、高原地方は一體に無樹帯を成し、唯ダルマシヤミの境界山脈に於てのみ森林を見るのである。

氣候は海岸及谿谷地方は温和であつて、冬短いが、山地方は之に反して冬は非常に寒氣が強く、數日間吹雪の爲めに交通の妨げらるゝことが屢ある云ふ。

○黒山國の變遷

人種上に於ても政治上に於ても將た又歴史上に於ても、黒山國と塞爾維とは、互に切つても切れぬ深い因縁がある。故に今度此二國が同様の運命に遭遇したのも理の當然である。謂はねばならぬ。そこで先づ簡單に、黒

山國の歴史に就て述べやう。

往古此地の山間には一面に黒松が繁茂つて居たので、羅馬人からモンテ・ネグロ即ち黒山國と云ふ名を取つたのである。又到る處の山岳が石灰岩より成つて居るので、土人の口碎に、太古創世紀の時、神が天上から地球に石を撒き散されたが、偶黒山國の上を通過せられた時にその袋が破れて、残りの石が皆此地に落ちて來たのであると傳へて居る。

此地は往古羅馬領イリリクム州の一部であつたが、其當時此地名産の黒松は多く船材として羅馬人により使用せられたと云ふ事である。

羅馬帝國滅亡後は舊塞爾維帝國に併合せられ、其後ビザンツ帝國の起るに及びて其版圖に屬したが、ネマンヤ朝の時に再び塞爾維の手に歸した。

然るにヅシヤン大帝の死後バルシヤニ呼ぶ塞爾維の一貴族が、自立して此地及北亞爾坡尼に一公國をば建立し、ゼタ公國の名を取つた。斯くて其子孫のステファン・クルノブルなるものがスコダール(即ち今のスクタリ)をも含める土地を領有して大に勢力を發展した。

黒山人が初めて不羈獨立の精神に富める勇敢無双の民たるを世界史上に表明したるは實に此時の事であつた。即ちコツソヴォの決戦により巴爾幹諸邦の運命は土耳其の爲に封ぜられてしまひ、黒山國に塞爾維人等の避難所を爲つたが、獨りクルノブルは其死に至る迄其子のイウアンニ共に、勝誇れる土帝マームード二世の軍に抵抗し、前後六十三回の會戦に一度も敗を取らなかつたとして傳へられて居る。

然るに一四八四年イウアンはジャブリアツクの陥落と共に、遂に力盡きて退却したが、爾來チエチンエにその都を移し、天然の要塞に據りて其獨立を維持した。

其後一五一六年彼の後繼者ジョルジ五世が其位を辭したので、僧正のバビルが推されて國公を爲つた。斯くて所謂僧正公なるものが引續き其公位に即くこころなつたのであるが、一六九六年に至りヘルツエゴヴキナより移住したるペトロヴキツチ家のものが之を世襲するに至つた。而して其初代のダニエル一世は一七一五年に露國の彼得大帝と同盟條約を結んで土耳其に對抗した。是ぞ黒山國が露國の附庸同様の關係を有するに至つた發端である。當時彼得が黒山公に寄せたる親書は、今日尙保存せられてチエチ

ンエにあるが、其内容は、基督教國を保護するものは勇敢なる黒山國民の援助に頼らなくてはならぬと書き起し、夫よりスラヴ民族の統一的發展の必要を述べ、終りに同一言語と習慣と人情とを有し、等しく基督教を信奉するものは、互に協同一致して不倶戴天の土耳其を伐ねばならぬと云ふ事を記載してある。之によりて見れば世に汎スラヴ主義として知られて居るものは、既に今より三百年前に彼得大帝によりて鼓吹せられた事が分る。尙此等の詳細なる史實は内藤文學士と予の合著に係る「巴爾幹の變遷」に就て一讀せられんことを冀望する。

何故に彼得大帝が斯様な遠く隔たつて居る黒山國をば誘うて、露國と同盟を結び土耳其に當らしめたかと言ふに、是は無論黒山人が生れながらに

して勇敢であつて特に武事に長じて居るのを利用した次第であるが、その實、大帝は將來巴爾幹半島のスラヴ民族を一統して地中海上にその出路を求めよう云ふ遠大なる志望を懷いて居たので先づ黒山國をば我藥籠中の物とし、露國南下の前衛たらしめんとしたのである。而して大帝の後繼者は此遺訓的政策を守り、その後益黒山國と最も親密の關係を結び、一種の保護國同様とした。是れぞ今次の歐洲戰亂を誘致したる否定すべからざる一遠因である。されば黒山國の今日あるのも蓋し偶然でないを謂へる。

その後西曆一七八八年露國が奧國と共に聯合して土耳其に向つて戦ひを開きたるに際し、黒山國は露國の先鋒と爲つて土軍と戦うた。此の時黒山公ペーテル一世は、内にありては能く國內の秩序を整へ、一八九八年初め

てゾアコックと稱する法典を制定し外にあつては更に又一八〇五年より一八一四年に亘りて露國と同盟して土耳其に當り、大に戦功を奏し、初めて世界に黒山國の存在を知らしめたのである。

一八三〇年その後を繼ぎたるペーテル二世は露國に於て教育を受け、智勇兼備の明君であつて、力を國民の知識啓發に盡し、文化の發達に貢獻したことが決して尠くなかつた。而して一八四〇年以來土耳其と戦うて大に之を苦しめた。

彼の死後、一八五一年彼の甥のダニコ二世が代り立つたが、彼は僧正の職を辭したので、以後黒山公の位は従前の如く僧官の身でないものが之を繼ぐこととなり、政教一致の風を打破した。彼は一八五五年に新たにダニ

ロ法典なるものを制定し、租税法を定め、初めて舉國皆兵主義に基ける兵制を布き、大に軍備の改善を行つた。而して一八五四年クリミア戦争の起るに及び、彼の弟のミルコが兵を出だして露國に應援し、土軍を破ることに實に前後八回に及んだ。

然るにダニコ二世は一八六〇年の夏八月家族を伴つてカッタロの海岸に避暑し、一日公妃と共に散策を試みつゝあつた時、突然一兇漢の爲めに狙撃せられて、その翌朝非命の最後を遂げた。此の犯人は黒山國人であつて個人的復讐の爲めに行つたものとして傳へられて居るが、直に逮捕せられ、深くその理由を質さずに死刑に處せられたと云ふ。

右のダニコ二世は男子がなかつたので、弟ミルコの子で、即ち彼の甥に

當たるニキタがその後を繼ぐことゝなつた。是れぞ現王ニコラス一世である。

○可憐なる黒山國王ニコラス一世

今や不幸にして亡命の客となつたニコラス一世は、一八四一年に生れ、十九歳の時、即ち一八六〇年に公位に即いたが、文武兼備の英主であつて卓越せる政治上の材幹を有して居たばかりで無く、文學を愛し詩文にも長じ、特に又仁慈の心が深かつたので、人民は恰も師父の如くに欽慕して措かなかつた。

實に彼が既往五十五年間の治世は、黒山國に於ける最も光彩ある時代であつた。今其顯著なる王の治績を擧げて見るに、第一、一八七六年ボスニ

アの叛亂に乘し、塞爾維と同盟して土耳其に當り、翌年露土戦争の起るに及び露國に應援したるが爲、一八七八年の伯林條約によりて其獨立を公認せられ、新に四千二百九十平方吉米突の地を獲得し、殆ど其領土を二倍大にした。越えて一八八九年王の長女ミリツツアをばペーテル・ニコライヴキツチ太公に嫁して、茲に露國帝室と最も近親の縁故を結びたる爲、毎年露國より數千萬の補助金と軍需品とを得て大に軍備を整頓した。更に又一八九六年三女ヘレネをば時の伊國皇太子即ち今の皇帝ヴキクトリオ・エマニユエル三世に嫁してより以來、伊國より莫大の資本を供給せられて港灣の建造或は鐵道敷設の如き文明的經營に従事することを得た。

斯くの如く歐洲第一流の二強國をば、其後援として、一段と其の國威を

發揚したので、此迄公爵を稱し居たるニコラスは、遂に一九一〇年八月誕生の吉日を選びて王の尊稱を取り、爾來王國と稱するに至つた。

其後一九一二年十月巴爾幹諸邦と聯合して土耳其と戦ひ、戦捷の結果翌年ブカレスト條約に依り、地味の比較的肥沃なる地點を獲得し、而も其地積と人口とを更に二倍大にした。

若し黒山國にして之を以て満足し、銳意内治の改善と國力の發展とを圖つたならば、今日の如き悲運に遭遇することも無かつたであらうに、惜い哉望蜀の念に驅られ、大塞爾維運動に参加した爲め、塞爾維と同一の運命を見るに至つた。乍併吾人は大に黒山國の爲に同情すべき他に大なる理由がある。抑ボスニア、ヘルツゴヴィナの兩州は、塞爾維と同じく同民族

の住地でもあり、特にヘルツェゴヴィナは今の黒山國王家の發祥地でもある。故に黒山國民は機會だにあれば、之を併合したいと云ふ志望を夙に懷いて居た。然るにましまし此州は一九〇八年に奥國の爲に奪取せられ、加之先年巴爾幹戦争の際、全力を傾注し多大の犠牲を拂ひて占領したるスクタリ市も亦奥國の威嚇に遭ひて無念ながらも之を抛棄した。されば奥國にする怨恨は深く骨髓に徹し、臥薪嘗膽、且報復の日の來るを待つて居た。するに偶一昨年秋サラエヴォ事件より、本來同民族でもあり且同盟でもある塞爾維が奥國の爲に屈辱を受けたと見るを見ては、最早忍ぶことが出来ずして之に應援して起つた。是は決して無理もない次第であるが、唯吾輩の甚だ遺憾に思ふのは、餘りに事を急いだ爲、却て敵の策中に陥

り、今日の逆境に陥つた事である。されど戦局の前途も未だ容易に逆睹する事の出来ぬ今日に方たり左程に黒山國の爲に悲觀する必要もないかも知れぬが、若し聯合軍にして奮勵一番一日も速に形勢を挽回せざる限りは、此可憐なる小國の運命は遂に全く敵手に委せざるを得ざるに至るやも料られぬと思ふ。兎に角氣の毒なるはニコラス老王の身の上である。

第三章 勃牙利

○民族上より觀たる勃牙利人

勃牙利人は今日普通にスラーヴ民族であるとして知られて居るが、その實その祖先は、吾日本人や土耳其人と同様に蒙古人種であつて、最初はヴ

オルガ河畔に住んで居た。而してブルガールの稱呼は以前ボルガと呼んだ即ち今のヴオルガ河の名から來たこと云ふ説があるが、それよりも寧ろブルガール人がその河畔に住んで居たので、その河がその名を取つたこと云ふ説の方が本當らしい。

そんな事はごちらにした所で別に差支はないが、彼等はヴオルガ河畔から次第に西南の方に居を移し、遂に第七世紀の末頃に巴爾幹半島に現はれ、已にその以前より此地に住んで居たスラーヴ人を征服して、今の勃牙利地方に一王國を經營した。その結果スラーヴ人と血液を混合して、その固有の特徴を失ひ。寧ろスラーヴ化してしまつた。それは英國の征服者であつたノルマン人がアングロサクソンに同化したのと同しく似て居る。

然るにその最初の勃牙利人はスラーヴ人ニ風俗習慣等に於て全く異つて居た。今その顯著なる點を擧げると、勃牙利人は、主として馬上に於て戦つたが、スラーヴ人は之に反して徒歩にて戦つた。勃牙利人は多妻主義であつたが、スラーヴ人は一夫一婦主義であつた。前者は貴族的であつたが、後者は平民的であつた。勃牙利人は好んで肉食をしたが、スラーヴ人は菜食の方であつた。それに又勃牙利人はスラーヴ人ニ異つて捕虜に對しては極めて殘酷であつて、平時の刑罰も亦頗る嚴刻であつた。又その君主は「汗」の稱號を用ひ東洋流の嚴肅なる儀式を重んじ、又多くの奴隸や兵士をば使役した。此點はスラーヴ人が一人の主權者の下に絶對的服從を爲すのを好まなかつたのに比して大なる差異がある。

要するに此兩民族が最初巴爾幹半島に於て出會つた時に、正反對の性質を有して居た事は、その當時の史家の明白に記載する所である。

然るに前に述べた如く勃牙利はその後スラーヴ人ニ血液を混じて、固有の特色を失つたと言ふものゝ、今尙自らその體型に於て他のスラーヴ人ニ違つて居るのを容易に發見することが出来る。即ち彼等は概して塞爾維人よりも身長が短く、頭が左程に大きくなって中位である、顔は幅く又扁平であつて、眼が小さく、頭髮は硬くて黒いのが多い。特に此蒙古人種的特徵を多少存して居るものは、北方の勃牙利人であつて、南方のものは、餘程スラーヴ人の方に近い。

性質は又さうであるかと言ふに、彼等は一般に激昂し易く、動もするこ

腕力に訴へんこの風がある。されど塞爾維人や殊に黒山人が怠惰で労働を嫌ふ傾きがあるのに反して彼等は至つて勤勉で精力が強く加ふるに概して恰憫の方である。主として農事に従事し、特に野菜や果實の栽培に長じて居る。

要するに彼等は巴爾幹半島に於ける最も有望なる民族であるが、過去に於ても亦光彩ある歴史を有して居る。

○舊勃牙利帝國

勃牙利人に關する最初の史的記録は、第五世紀の末頃アルメニアの史家モーゼス・コーレンなるものに依りて書かれて居る。之に據るに當時勃牙人はヴォルガ河に定居し、ブラール後にブルガールと呼ばれたる地をば、其

首府として一王國を經營したと云ふ事であるが、要するに巴爾幹半島侵入以前の勃牙利歴史は極めて荒唐無稽であつて信を措くに足るものが無い。

然るに彼等の巴爾幹半島に侵入したるは、西曆六百七十九年の頃であるが、其君長イスベリック(一名アスバルク)なるもの同族を率ゐてベッサラビアを經由して、多瑙河の南方に進み、其地方のスラーヴ人を征服して、新に一王國を建立したとする。時の東羅馬皇帝ユスチニアン二世は六百八十九年に勃牙利人と和を約し、其王國を承認したるも、其後其危険なるを認むるに同時に、他の蠻族の手を籍りて勃牙利と戦ひ、之を半島以外に驅逐せんとした。然るにイスベリックの後繼者は征服したるスラーヴをば養成して勇敢なる軍隊を編成し、強硬に東羅馬の軍に抵抗した。斯くて多瑙河

右岸に定居してより基督教に化するまで約二百年間に於ける、彼等の歴史は、主として東羅馬帝國との悲惨なる戦闘を以て満ちて居る。

イスペリックの死後約百年即ち八百二年に方たり、英傑クルーム出でて大に武威を四方に振ひ、一大帝國を建立した。更に又百年を経て英主シメオンの朝に至り、勃牙利史上に一段の光彩を放ち、スラブ文學の黄金時代として稱せられた。實に勃牙人が基督教に化し、希臘帝國に觸接してその文化を輸入し大に面目を一新したるは、此の時であつた。

然るに榮華盛衰は事物の免れざる所である、其後勃牙利人は日に文明に赴くと共に漸く驕奢安逸の風に流れ、往年の元氣は其跡を絶ち、之が爲千十八年脆も東羅馬軍の爲に打破られ、憐れ終に國家の命運は封ぜられてし

まつた。斯くて勃牙利人は希臘帝國の治下に立つこと百五十年の長きに亘つたが、此間塗炭の苦に呻吟した。然るに千八百九十年ペーテル並にアツセンの兄弟は、叛旗を翻して大に希軍を破り、チルノヴォ市に於て其獨立を宣言し自ら帝の尊稱を取り、其後僅々二十年間に、ベルグラードより黒海に至り、多瑙河よりアドリア海並に多島海に達する巴爾幹半島の大半を征定して新に一大帝國を建立した。

此第二次の勃牙利帝國は二百年に亘りて繼續したが、此間その西方に侮るべからざる一大國起り、千三百三十年之に戦うて大敗し、其結果巴爾幹に於ける覇權を全く失ふに至つた。此所謂強敵は外でも無い塞爾維の事であるが、更に勃牙利は之よりも尙然るべき外敵に侵入せられて遂に再び

滅亡の悲運に遭遇した。實に勃牙利の變遷は走馬燈を観るが如くである。

○土耳其治下の勃牙利

凡そ勃牙利の歴史の如く、其變遷の甚だしきものは、多く他に無からうと思ふ、即ち最初ヴオルガ河畔に起りて、後巴爾幹半島に其居を移し、スラーヴ民族を従へて之を混化し、更に希臘帝國と戦うてその物制度を採用し、覇を半島に稱するに前後二回、一時はスラーヴ文學の中心となれるも隣邦の塞爾維の勃興と共に、漸く其勢ひを失ひ、更に一層恐るべき強敵たる土耳其の侵入するに及び、遂に千三百八十九年其亡ほす所を爲り、爾來五世紀に亘りて回教政府の治下に立ち、世に全く其存在を忘らるゝに至つた。實は此長き年月間に於ける勃牙利の光景は、悲惨の極みであつた。

其首府チルノヴォを首め多くの市邑は、荒廢の儘に繼續し、稍氣概ある住民は、山間に移住して飽迄も土耳其に對して抵抗を試みたが、其多くは、回教に改宗して土耳其民族の待遇を受くるを此上もなき幸榮とし、或は希臘教會の保護の下に、辛じて其生活を維持した。斯くて彼等は自ら勃牙利人を稱するを耻て、希臘人なりと呼ぶものあるに至つた。されば第十九世紀の初に方りては歐洲一般に勃牙利人なるものゝ存在を知るものが甚だ稀であつた。現に一八二八年露國人が此地を侵略せるの時其住民がスラーヴ語を語るを聞きて驚いたこと云ふ事である。

然るに其頃漸く歐洲の風潮につれて、勃牙利人も亦國民的自覺の念を生じ、初めて千八百三十五年にガヴロオに學校を起し文學の復興を見るに

及び、獨立運動の氣運も亦その萌芽を現はして來た。斯くて一八七六年フイリポポリス地方に起れる叛亂は、土耳其をして端なくも勃牙利人虐殺事件として知らるゝ歐洲基督教民を震撼したる一大椿事を惹起せしめた。是ぞ歐洲列強が巴爾幹の事件に干涉するの端緒を開きたるものであつて、半島の風雲は是より常に險惡の兆候を呈し、所謂伏魔殿たるの實を示すに至つた。

然るに前記勃牙利人虐殺事件の如きは、其後屢世に傳へれたるアルメニア人虐殺事件と同様、故意に誇張して報道せられたるものであつて、實際に於ては其當時ビーコンスフィールドが言へるが如くカツヘエーハウスのバツプルに過ぎなかつたが、兎に角此問題が遂には、翌年の露土戦争、次

でサンステファノ和約並に伯林會議の導火線となつた。此時以來、露國の巴爾幹に於ける野心の世に暴露せらるゝと同時に、初めて勃牙利の存在も亦世に認めらるゝに至つた。

○伯林條約と勃牙利公國

伯林會議は歐洲列強をして單に露國の南下政策に痛棒を加へ、而も各自の慾望を満足せしめたる以外に、何等の解決をも近東問題に下したのでは無かつた。否寧ろ巴爾幹諸邦の利害を無視し、半島の事件をば恰も自己のものゝ如くに處理し、却つて之が爲めに救濟せられる諸邦之を救濟したる列強との間に不和を醸成し永久に一大禍根を貽したに過ぎなかつた。

就中勃牙利は此會議の結果、假令新公國として承認せられたことは言へ、

曩にサンステファノ和約に依りて劃定せられたる所謂大勃牙利の領土は、土耳其の納貢國としての勃耳利公國ミ、土耳其の主權の下の東ルーメリア自治州ミ、依然土耳其直轄の一州たるマセドニアミに三分せられ、而も勃牙利公國は多瑙河ミ巴爾幹山脈の一小地域に限定せらるゝことゝ爲つた。

斯る不自然にして且不合理なる劃定が決して永久に半島の平和を維持する所以のもので無かつたことは、識者を待たずして明かであつたが、果然其後勃牙利の東ルーメリア併合運動に次で勃塞戰爭を喚起し、又一方にはマセドニアをして伏魔殿の奥の院たらしめ、遂には之が爲に最近の巴爾幹を誘致し、延いては又今回歐洲戰亂の一大素因たらしめたのである。

却説最初新公國はバツテンベルグ家のアレキサンデルを選立して公國ミ爲したが、公は兎角排露的政策に傾いたので、露國の陰謀ミ一部國民の不平ミに因り、遂に位を辭するの已むなきに至つた。仍つて一八八七年に獨逸ザクセン・コーブルヒ・ゴータ家のフェルヂナンド即ち現王が其後々繼ぐことゝなつた。

フェルヂナンド公が即位の當年は僅に二十六歳の青年であつたが、非凡の政治的材幹を有して居たので、巧に内外に於ける幾多の難關を切抜け、治世二十餘年間に於て顯著なる治績を挙げた。此に於て彼は巴爾幹のカイゼル・ウキルヘルムミとして許され、勃國は又「近東日本」てふ名を取るに至つた誰れでも三十年前にソフィアに遊びたるものが、今日のソフィアの光

景を視て驚歎の聲を發せぬものは無からう、實に其當時は微々たる土耳其藩屬國の一小市に過ぎなかつたが、爾來驚くべきの發達を遂げ、一九〇八年に公然獨立の王國と稱するに至つて、一層其面目を新たにし、巴爾幹半島中最も有望なる前途を有する國民として目せらるゝに至つた、是は素より勃牙利人が他のスラヴ民族と異なり、一般に進取向上の精神に富み、而も勤勉の美風を有するが故ではあるが、一には又フェルヂナンドの如き明主をその上に戴きたるが爲である。

然るに勃牙利は、斯くの如く短年月に於て長足の發達を遂げ、自らも巴爾幹の覇主を以て任じ、人も亦之を許さんとしたるに、餘りに自己の慾望を逞うせんとして、千仞の功を一箕に缺くの失態を演じた、是は外でもな

いが、一九一三年に於ける、第二次の巴爾幹戰爭である。此一大失態こそ實に勃牙利をして昨秋獨逸側に與みして、塞爾維に向つて干戈を執るに至らしめた主たる原因である。蓋し勃牙利は一には之により前年の耻辱を雪がんとし又一には宿年の大志を遂げんとして起つたのである。

○勃牙利の前途如何

歐洲戰亂の勃發以來昨年秋九月頃迄は、勃牙利の去就向背に就て世間に種々の説が行はれて居たが、多くの人々は協商側の樂觀説に味方して起つ様な事は斷じて無からうと信じて居た。然るに一朝マツケンゼン將軍が獨逸軍を率ゐて塞爾維に向つて殺到し來ると同時に、勃牙利は忽ち從來の中立的態度を豹變し獨逸軍と共に塞爾維に向かつて開戦した。するに當

時世人の多くは全く之をば意外とし、その背德的行動を非難して已まなかつた。乍併張勃牙利が斯かる態度に出づるは、最初より分り切つて居た事で、苟くも巴爾幹戦争後の勃牙利の對外政策に注意を拂つて居たものには、容易に豫想し得たのである。現に最近外電の傳ふる如く勃牙利は既に一昨年十二月に於て獨逸兩國と秘密協約を遂げて居たこと云ふ事では無いか。

要するに勃牙利が巴爾幹戦争の失敗以來、時機を見て塞爾維及希臘より受けたる屈辱を雪がんとして居たのは明白なる事實である、就中巴爾幹のカイゼルと云ふ名を取つた覇氣満々たる國王フェルヂナンドが何條今回の如き千載一遇の好機を逸する様な事をする筈が無い。されば協商側が切りに説得して自分の味方に引入れようとして努めても、言を左右にして應じ

なかつたのも不思議では無い。是は何も獨逸の爲めに瞞着せられたのでは無い。勃牙利が却つて之を利用したのに過ぎぬ。未だ此の戦争が如何に落着するか分らぬ今日に方りて、その是非を論ずることは固より出来ぬが、兎に角勃牙利の此の舉に出でたるは、洵に至當の事であると思ふ。英國のバツクストン氏も論じて居る通り、勃牙利は此迄他のスラーヴ民族中のジュダス即ち叛逆者と呼ばれて居たが、是は汎スラーヴ運動に参加しなかつたからである。それに本來勃牙利人は極めて打算的であるから唯自國の強大をこそ望め、露國の御先に使はれて自家の利益を犠牲に供する塞爾維の如き事は斷じてしない。尤も此迄親露主義に出でたことも無いでは決して無いが、又一方は親獨逸主義をも執つて居た。所謂八方美人的政策を弄し

て居たのであるが、そこが勃牙利の勃牙利たる所以であつて、外交にかけ
ては却々隅に置けない方である。此點に於ては遙に塞爾維や黒山國よりも
現代式の外交術に長じて居る。

更に又勃牙利の爲めに大に辯じねはならぬのは、勃牙利が特に自己本位
に重きを置く所以は、その同一民族が他の巴爾幹に於ける競争者の塞爾維
民族や希臘民族又羅馬尼民族よりも、その數に於て遙に劣つて居るので、
是非共同民族を糾合して鞏固なる國家を組織せぬ以上は、遂にその存立を
危くするの憂ひがあるからである。之が爲めにマセドニアに散在して居る
同種族を統一する必要を感じ所謂大勃牙利の宿志を遂げようとして全力を
之に傾注して居た。是は勃牙利としてはさもあるべき事である。併し乍ら

勃牙利が果して此の目的をば此度の戦争によりて達成するや否やが一疑問
である。假りに獨逸が最後の勝利を占めたとしても、勃牙利はその聯邦の
一かさなくば保護國ならぬ限りは、到底獨力を以て國家を維持して往く
ことは不可能であらうと思ふ。

○勃牙利の地理的觀察

勃牙利も塞爾維も同様に山地であるが、その主なる山脈はバルカン山
脈であつて、又之に併行してスレドナゴラ山脈が走つて居る。その南西
には海拔二千二百九十米突のヴィトシヤ山脈又南方には海拔二千九百三
十米突の高峯ムツス、アララを有するロードベ及リーラ山脈がある。平原
はマリツツア河谷ミソフィア平原がその重なるものである。河流には富

んで居るが、舟行に便なるものは極めて尠ない。

氣候は夏は短かいが暑さは却々厳しい方で、冬は一般に乾燥して居て降雨は春と秋とに多い。

産業は主として農業であつて、人口の七分の五が耕作に従事して居る。有ゆる種類の穀物を産し、烟草も可なる産出する。牧畜も盛かんに行はれて居るが、羊毛、皮革、棉花、棉布、並に紙巻烟草等の製造が主たる工業である。輸出品は穀物を以て太宗とし家畜、皮革、繭、果物、烟草等が之に亞ぎ、東ルメリアは薔薇の名産地として世に知られ、古來盛かん薔薇油を輸出する。貿易國としては奧洪國及び獨逸がその首脳部を占めて居る。是れが今度勃牙利が獨逸側に味方して起ちたる經濟上の理由として勃

牙利人によりて唱へられて居る。

鐵道も比較的善く發達して居てその總延長は、一千四百哩である。二個の近世式の築港がある即ち黒海に臨みヴァルナミブルガスであるが物産の輸出に適して居る。

政府は切りに工業を奨勵して居るも、その結果が餘り良好でない。勃牙利人は一般に農業を好む風がある。彼等は織物業には大に長じて居るが、概して製造業は至つて尙幼稚であつて製作品は多く之を外國から仰いで居る。貨幣の如きも自國では鑄造することが出来ぬ様な有様である。

礦物も、石炭や、鐵や、鉛、錫、銅、金などの種類に富んで居るがやつと近來その採掘に従事するに至つた。

乍併塞爾維や黑山國や又土耳其なきに比較すれば、經濟上に於ても遙かに進歩して居る。

首府のソフィアは一八八七年には僅かにその宅地が二百五十五ヘクタールに過ぎなかつたが、今日では殆んど三倍し約七百ヘクタールに達して居る。而して最近二十五年來八千九百の新建築が成り、殆んど十倍の戸數の増加を示して居る。市街の體裁なきも全たく西歐風で、さても塞爾維のベルグラードや土耳其の君府なきの及ぶ所で無い。最近の人口は十萬以上に達して居る。ソフィアに亞いでの大都會はフィリツポポリス、ルシユチュツク、ヴ・ルナ等である。

第四章 羅馬尼

羅馬尼人は普通人種上羅匈民族に屬して居るに於て知られて居り又羅馬尼人自身も爾く信じて居る。併ながら近來學者の研究の結果に據るに從來想像せられて居つた如くに今日の羅馬尼人は紀元後百年代に羅馬より殖民したる屯田兵の後裔では無く。アルバニアの南方に住居して居つた一種の羅匈民族が後にダニユープ下流の即ち今の羅馬尼地方に移住して、羅馬尼人の祖先を爲したものらしいに云ふ事である。併ながら言語學上より究めて見るに羅馬尼語の殆ど半はスラブ語系統に屬して居る、其他は今のアルバニア語と同一語源から出て居るものと又種々の他國語とである。して見

るこ中古民族大異動のあつた際に前から住んで居た羅匈民族は他の民族殊にスラブミ血液を混淆して本來の特質をば失つたものとして考へられる。併ながら彼等は巴爾幹諸邦中獨り言語上に於ても風俗上に於ても又思想上に於ても、獨特の發達を爲して居るこ同時に彼等自ら巴爾幹民族は大きに選を異にして居るこ信じて居る。故に若し羅馬尼人をは他の巴爾幹國民と同視してもしようならば、彼等は大に之を侮辱せられたこととして感ずるのである。事實に於てその首府ブカレストの如きは小巴里の名を以て世に知られて居る如く、市街の體裁などは巴里と殆ど異ならない程にも立派であつて巴爾幹諸邦中他に之に比肩し得べきものを見ない。斯くの如く羅馬尼人は自分自ら巴爾幹半島中に於て超然として而も其周圍のスラーヴ民族を

卑んで居る、彼等はその國境をば露西亞と相接して居るにも拘らず露西亞語を流暢に話し得る者が極めて少くないが、之に反して教育ある者は佛蘭西或は獨逸語を巧に操つるものが多い。

ダニューヴ河の賜として知られて居る羅馬尼は殆ど平地であつて、他の巴爾幹諸邦とは全然その地勢を異にして居た。唯北西方にはカルバシヤン山脈ミトランシルヴァニア、アルプス山脈が自然的に國境を成して走つて居るが、是等の國境山脈も別段高いこと云ふ程ではなく。トランシルヴァニアアルプスを横ぎる所のローテツルム山道の如き海拔僅に八百三十二米突に過ぎない。乍併他のアルプス山系のものに異なりて山道が險惡であつて容易に登攀することの出来ぬ。又其低き地方には今尙諸所に處女林が多く散在

して居る。加之有名なる難處「鐵門」が最近までダニユヴ河に於ける舟行を妨げて居た。之が爲に羅馬尼は古來他の西歐諸國と殆んぎ全く交通が遮斷されて居た。而して千八百七十八年迄は其沿岸地方は全く土耳其の領有となつて居つたので、直接海に出づることが出来なかつたが、一度その地方が羅馬尼の手に歸してから八千萬法の金を投じてダニユヴ河口に一の港灣を築いた。之が爲め始めて海に出づることが出来る様になつた。ダニユヴ河は羅馬尼領内に於て河幅は八百乃至千四百米突であつて鐵門より海に至る迄の延長は約一千基米突である、實に同河全長の三分の一以上は羅馬尼を流れて居る、而してその河谷の地味の肥沃なることは同沿岸の匈牙利よりも遙かに勝つて居る、之が爲め羅馬尼は世界に於ける農産國中首

首位を占めて居る。是れぞダニユヴ河の賜の名ある所以である。小麥の輸出は全輸出品の八割乃至九割に當たり小麥の外玉黎蜀葡萄オリーブ等を多く産し、羊の牧畜は蘇格蘭に次で有名である、

氣候は農産物に對して頗る適して居る、夏は熱くして而も水蒸氣を多量に含有し時に攝氏の四十二度に上ることがある、是が爲に穀物の成長に大に便宜を與へ。冬は可なり寒むく、零下三十七度に降ることがあるが産物には何等の害をなさない。

併ながら寒氣の爲に毎年冬期になるにダニユヴ河口が氷結する。それ故に羅馬尼に取りて最も必要なる事業の一は歐羅巴の鐵道網と聯絡する鐵道を沿岸迄敷設せることであつたが、此計劃を遂行したるが爲に今日では

冬期に於てもコンスタンツァ港より産物を輸出するこゝが出来る様になつた。之に反し沿岸より百基米突を隔つる内地のヴキラーガラツ港の如きは十二月より三月迄堅く氷結して船舶の出入を杜絶してしまふのである。

主たる輸出品は穀物に亞いでは石油であるが、實に羅馬尼は世界屈指の石油の産地である。石油の採掘には殊に獨逸の銀行が巨額の資本を投じて居る、之に次くは奧太利であるが有名なるスタンダード石油トラストが羅馬尼の石油鑛を我が掌中のもゝ爲さんとして頻に運動して居る云ふことである、石油の質は格別上等ではないが燈火用よりも寧ろ燃料に多く供せられて居る、羅馬尼に於て大に缺乏を告げて居るものは石炭であるが、それにも拘らず工業は近來長足の發達を遂げつゝある、又此地は頗る温泉に

富み硫黃及び沃度ホルム等を多く産出し食鹽も重なる産物の一つである。

千八百六十二年にモルダヴィアミウアラキアの二公國が合併して一の獨立國を建設し、之を羅馬尼公國と名づけたのであるが、千八百六十六年ホーヘンツォールン、シグマリンゲン家のカロールが選まれて國王と爲り千九百十四年迄支配して居つた、羅馬尼が長足の發達を遂げたのは一に此のカロールの賜と云ふても過言でない、その王妃をエリサベツトと云ひ獨逸の貴族ウキード家の出であつてカルメン、シルヴァミ云ふ名を以て詩人として世に有名である、千八百七十八年伯林條約によりドヴルジャの一部分を加へ、千八百八十一年三月に王國となつた、巴爾幹戰爭後即ち千八百十三年八月にブカレスト平和會議を開いて以來大に其國威を揚げた、ブカレストは歐羅

巴に於ける最も美しき而も最も物價の高く且つ騒々しき都市の一である、市の人口は三十四萬である、之に次ぐ主要なるものはヤツシー（人口七萬六千）ガラツツ（人口七萬二千）である。

羅馬尼は經濟上に於て巴爾幹半島中の首位を占めて居る易は千九百十一年に於て十二億六千百レイ（法）を計上し年々大なる増加を見るのである、羅馬尼への獨逸が輸出額は約一億二千五百萬レイ、奧太利が八千六百萬レイ、英國は五千八百萬レイ、佛蘭西は二千四百萬レイ、伊太利は千八百萬レイ、土耳其並に勃牙利は千二百萬レイ、露國は千百萬レイである、即ち獨逸及び奧太利が貿易上最上位を占めて居る。又羅馬尼より外國への輸出は白耳義一億二百萬、奧太利一億千五百萬、和蘭五千萬、英國に三千五百萬、伊太

利三千五百萬、佛蘭西に二千八百萬、獨逸に二千七百萬、土耳其に二千二百萬レイである、

工業は却々發達をして居る紡績、羅紗、石油、スプリツス、砂糖等の製造が盛かんである、七百の製造場を有し其資本約五億レイ、石油採收には四億二千五百萬レイを投資し其採掘高百五十萬噸、石油輸出額六千百萬レイ、穀物輸出額四億七千七百萬レイに達して居る。

第五章 新アルバニア公國

此の新公國は先年即一九一二年の秋巴爾幹戰爭の際土耳其から獨立して始めて出來た國であつて、その後列強によりその獨立を承認せられ一九一

四年の春に獨逸の一貴族ウキード公が選ばれてその國公に爲つたのであるが、その實此の公國は奧伊兩國がスラーヴ勢力のアドリア海上に出て來るを防止する目的で共同して作つたのであるから。世に「奧伊兩國の私生兒」云ふ名を得て居る。然るにアルバニアの住民の多數は回教を奉じて居るので基督教徒たるウキード公をその國主として仰ぐのを好まず、その絶間もなく猛烈なる叛亂を起した。するにアルバニアの僭王として知られて居るエサツドバシヤが最初の程は假面を装ほつて新政府の陸相に爲りウキード公に忠勤を盡くして居たが、公の民望なきを見るに及んで漸やく野志を起し、自から代はつて國王たらんことを欲し、國公廢立の陰謀を企はだてた。所がウキード公は早やくも之を知りてエサツドをば國外に追放した。

然るに之が爲め却つて國內の叛亂は益々猖獗を極はめ、之に對して施すの策なきに至つた。是と言ふのは一面に於て伊國が陰かにエサツドを庇護して獨逸側であるウキード公を排斥し伊國の勢力を此地に張ろうとしたのである。他方三國協商側特に露國が汎スラーヴ政策上獨逸側の手にアルバニアを委することを欲しなかつたので、他の列強はその紛亂を傍看し、ウキード公が切りに援助を求めても更に應じなかつたのである。茲に於て公は益進退に窮し、遂に自から引退するの已むなきに至つた。此の時恰かも好し歐洲戰亂が起つたので、之を機會に公は一九一四年の九月初めに本國に引上げた。するに伊國に遁がれて居たエサツド、バシヤは好機到れり爲してアルバニアに歸へり、その野心を果さんとした。斯くて一時彼は大に

民望を收さめ事實上アルバニアの主權を手に握つた。然るにその後十一月土耳其が獨塊側に與みして神聖戰を宣するに至つて形勢茲に一變し、塊國側の勢力頗る加はり、多數の回教徒は漸次土、塊兩國の買收する所を爲り、エサツドの勢力日に衰運に傾むくるに至つた。さる程にチラナ、シャツク、マリソール等の各地に暴徒蜂起したが、此迄此地方に潜伏して居た土塊兩國の將校も亦之に加はりその勢侮ざるべからざるに至つた。斯くて首府ヅラツツオの如きは恰かも包圍の狀を呈し、チラナに在つたエサツドの居宅は燒拂はれ彼は身を以てクロヤに逃がれた。次でヴァロナも亦不穩の兆を示したので伊國は直に軍艦を派遣し、多數の水兵を上陸せしめて之を占領した。

斯くの如くにしてアルバニアは混沌たる状態を現出するに至つたが、最近塊軍は黒山國を破ぶつてその全國を占領し、更に進んで北アルバニアの要市スクタリを陥いれ、今やヅラツツオ附近迄侵入した。之によつて見るに、少なくともアルバニアの北半部は早晚塊國の手に歸するやも知れぬ。さればアルバニアの運命も亦塞爾維並に黒山國と共に結局さうなるであらうが、頗ぶる興味ある問題である。

全體アルバニア人は如何なる民族であるかと言ふに、その人種的起源は今尙明かでないが、一般に古代のイリ、ア人と同族で印度歐洲巴人種であるとして知られて居る。然るに一説には、太古高架索地方からマセドニアを経て今のアルバニア地方に來たものであると云い、或は又本に紅海沿岸

に住んで居たこと云ふ説もあるが、兎に角彼等がスラーヴ族でも無ければ又希臘族にも屬せぬ事だけは確實である。而かして彼等は他の巴爾幹民族と異なり太古時代より此の地に住んで居て、しかもその多數は他の民族と混合せず今日迄その純血を維持し來つたのである。さればその風俗習慣の如きも著るしく他と異なつて居る。又その性質の如きも極めて慍悍であつて特に奥深かき山間に住して居るものは、常に掠奪鬭争を事とし、今尙野蠻未開の風を脱せぬ。さればその容貌並に骨格は男女共に立派であつて、又その固有の服裝の如きは我が日本のものに較や類似して居る。彼等の最多數は回教を奉じて居るが、北部には加特力教が行はれて南部のエピルス地方には、希臘教徒が最も多數を占めて居る。然るにアルバニアは一般に

險阻なる山嶽より成つて居て、交通が頗ぶる困難なる所から、久しく土耳其の治下に立つて居たものゝ更にその政令が行はれず、殆んど此迄にも半獨立の状態を持續して居た。然るに彼等には民族的團結力に乏しく、互に部落同士が反目鬭争し、秩序なるものが無い。従つて又商工業の如きは更に發達せず、人民は殆んど全く無教育である、而してその主なる産業は農牧であるが今尙幼稚の状態を脱せない。

天産物としては、特に礦物に富み鉄、石炭、銀、銅、アンチモニー等の鑛床を有して居るが、土人にしてその採掘に従事するものが無い。往古羅馬に領せられて居た時代には金や銀が盛かんに此地より採取せられたこと云ふ事である。

海外貿易は主として奥國人や伊國人の手に依つて行はれて居るが更に見るに當らぬ。

要するに一般の状態は實に幼稚貧弱を極はめて居て、更に西歐の文化に浴して居らぬ。

都會中で一番大きいのはスクタリ市であるが、その人口が三萬二千で之に亞ぐエルバサンにチラチが各々一萬二三千である。

現時の主府ヅラツツオの如きは、僅かに五千人で、又ヴァロナ港は六千五百人に過ぎぬ。

全公國の人口は約八十萬から八十五萬の間である。但しアルバニア民族の總數は百二十萬ばかりもあるがマセドニアや君府その他の地に散在し

て居る。

彼等は古代より伊太利の南部やシ、リ島に住んで居て、有爲なる人物を出して居る。現に伊國のビスマルクと呼ばれたクリスピー氏の如きもその一人である。又土耳其に於ても政治家や軍人として名を挙げたのが尠なく無い。

巴爾幹半島 終

大正五年三月二十日印刷
大正五年三月二十三日發行

定價金拾錢

東 西 時 論
第 五 編
巴 爾 幹 半 島

不 許 複 製

發 行 者 兼

五 味 貞 吉

印 刷 者

鈴 木 豐 吉

印 刷 所

東京印刷株式會社
東京市日本橋區兜町二番地

東京市京橋區加賀町四番地

發 行 所

通 俗 大 學 會

大 賣 捌 所

東京神田
錦町

京 華 堂

(振替東京一七〇七二)

電話新橋二二三九振替東京五九七

學文庫

正價各册金十三錢送料四錢

刊 近					刊 既				
(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
新渡戸博士移	三並良氏オイケンミ時代思想	高野博士本邦人口の現在及將來	後藤文學士文字の起源	上田博士國語學の十講	松岡博士日本の植民的發展	建部博士	後藤男爵	大隈伯爵	阪谷男爵
民論						都會生活と村落生活	日本膨脹論	國民教育論	最近の東京市

發行所
通 俗 大 學 會

東京市橋區加賀町四番地
電話新橋一三九二番東區九七五

通 俗 大

ボケツト型鳥子美裝二百頁

總裁 後藤男爵 會長 新渡戸博士 幹龍 居文學士

通俗大學文庫は廣き意義に於ける國民教育の一助たらんことを庶幾し、總裁後藤男爵、會長新渡戸博士、主幹龍居文學士等題材を撰擇して専門大家の玉稿を請ひ、幹部各自亦時に執筆す。一紙能く廬山の全景を寫さんこと極めて難しと雖も特に洗練せる最少數の文字を假りて、古今東西に渉る諸科の智識を容易に社會の各階級に溥及せしめんを欲するものなり。幸に大方同志の贊襄を蒙り、多少大正昭代の文運に裨補するを得ば吾儕の至願乃ち足る。

通俗大學會同人白す

東 西 時 論

ドクトル、ウエ
ルトハイメル著
通俗大學會譯編

森孝三氏述
通俗大學會編

米國諸名士論集
通俗大學會編

パウルゼン博士著
後藤男爵原譯
通俗大學會編

マックス
フェルヴォルン著
通俗大學會譯編

獨逸と東亞

獨逸の軍國的施設

歐洲戰後の米國人

政黨政策と道德

文化政策の生物學的基礎

刊既

刊既

刊既

刊既

刊近

通俗大學會會員規約

- 第一 本會ノ目的ハ廣キ意義ニ於ケル國民教育ノ助タランコトヲ期シ、古今東西ニ
 涉ル諸科ノ智識ヲ最モ容易ニ社會ノ各階級ニ普及セシメ併セテ世界の時事問題
 ニ關スル論評ヲ紹介セントスルニアリ
 第二 本會ハ前項ノ目的ヲ達センガ爲メ各專門家ノ執筆ヲ請ヒ「通俗大學文庫」ト題ス
 ル冊子ヲ毎月刊行ス
 (一)「通俗大學文庫」ハ現代人ニ必須ナル智識ノ紹介説述ニ努メソノ標準ハスベ
 テ現代人ノ生活ニ於テス
 (二)「通俗大學文庫」ハ平易簡明ヲ旨トシ専ラ内容ノ充實ヲ重シ而モ極メテ廉
 價ヲ以テ廣ク世間ニ頒タントス
 (三)「通俗大學文庫」ハ二百頁内外、總鳥之子裝釘、定價各册金三十錢、送料金四錢
 □ボケツト型、二百頁内外、總鳥之子裝釘、定價各册金三十錢、送料金二錢
 本會ハ「通俗大學文庫」ノ副産物トシテ世界的時事問題ニ關スル論評ヲ紹介セン
 ガ爲メ「東西時論」ト題スル叢書ヲ隨時刊行ス
 (一)「東西時論」ハ「通俗大學文庫」チ引キ續キ購讀スルコトヲ約シソノ六册分ニ
 □ボケツト型、百頁内外、假裝釘、定價各册金十錢、送料金二錢
 本會ノ趣旨ヲ賛シ「通俗大學文庫」チ引キ續キ購讀スルコトヲ約シソノ六册分ニ
 對スル割引代金一圓七十錢(郵券代用)割増)ヲ前納セラル、人チ本會會員トス
 但シ會員ニ送本スル郵税ハ本會ノ負擔トシ發刊毎ニ即日配本ス
 (一)會員ハ豫約以外ノ本會出版物ヲ隨時購入セラル、場合直接本會ニ注文セラ
 ル、モノニ限り特ニ郵税ハ本會ニ於テ負擔ス
 (二)本會會員ハ隨時本會主催ノ講演會ニ出席セラル、コトヲ得
 多數ノ會員ヲ有スル地方ノ有志ニシテ講演會ヲ催サントシ本會亦ソノ必要ヲ認
 メタル場合本會ハソノ地方ニ於テ講演會ヲ開催スルコトアルベシ

第三

第四

第五

46P1

終